HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究
Author(s)	浅川, 和幸
Citation	1-65
Issue Date	2013-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90990
Type	report
Note	平成22～24年度日本学術振興会科学研究費補助金　基盤研究(C) 研究成果報告書(研究課題番号22530904); 院生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。
File Information	08_asakawa_keken_non-elite.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 22～24 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）研究成果報告書（研究課題番号　22530904）

地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究

平成２５年３月

研究代表者　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院准教授）

平成 22～24 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）研究成果報告書（研究課題番号　22530904）

地方ノンエリート青年の社会的自立と
進路指導・キャリア教育の改善に関する研究

平成２５年３月

研究代表者　　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院准教授）

目次

はじめに　1

本研究の組織・成果等一覧　5

第１章　公立進学校における進路意識の地域差――課外活動との関連から
……　浅川　和幸　7

Ⅰ．はじめに
　１．本発表の問題意識と目的
　２．方法
　３．調査対象
Ⅱ．公立進学校における進路状況と進路指導の地域差
　１．入学時点の学力の比較
　２．進路決定状況の比較
　３．背景としての進路指導と地域格差
Ⅲ．学校生活における諸活動への注力と進路志向の地域差
　１．学校生活注力型の設定
　２．学校生活注力型という視角からの比較
　３．進路志向の比較
Ⅳ．札幌市の公立進学校Ｓ高校における課外活動の現状
　１．課外活動への全体的な参加状況と区別
　２．熱心な課外活動の質的特徴
　３．課外活動と進路志向
　４．課外活動と学校生活における注力の関係
Ⅴ．まとめ

第２章　地方都市における若者の雇用と社会的自立
……（院生担当分）　45

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．夕張市の概況
　１．少子高齢化の中の人口流出
　２．夕張市の産業
Ⅲ．地元における雇用
　１．農業部門（メロン農家）
　２．福祉部門
　　⑴空知における福祉職に就く人材の養成――Ｍ町立介護福祉学校
　　⑵福祉事業所――特別養護老人ホームＲ園を事例に
　３．企業部門

Ⅳ.「夕張メロン」生産組合・青年部所属の若者
1．家族と進路
2．就農前後の意識変容
⑴生業を通した意識形成――「夕張メロン」再罪の魅力、仕事のやりがい
⑵「競争と共同」という理念
⑶青年部のつながり
Ⅴ．まとめ

調査経過一覧　63

執筆は浅川と北海道大学大学院教育学院博士後期課程院生で行った。院生担当分は、インターネット公表を考慮し割愛した。

はじめに

本報告書は、平成22～24年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）の研究成果報告書である。題目名は、「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究」（研究課題番号　22530904）である。

本研究の目的は、ノンエリート青年の「学校から職場への移行」（職業的・人格的・社会的自立プロセス）に及ぼす現代社会の変化の影響と、高等学校において大きく原理的に転換しつつある進路指導・キャリア教育の変化との関係を解明し、それを通じて新しい進路指導実践やキャリア教育実践の提案を行なう目的をもっていた。現在社会の変化とは、社会的格差の地域的拡大、周辺化・縁辺化の急速な進行である。そして、北海道では地域移動を伴いつつ、集中と周辺化・縁辺化が同時進行している。

本研究で対象としたのは、地域社会の疲弊が日本で最も進んだ北海道の中枢－周辺・縁辺を構成する三つの地域であった。

2000年代中盤以降の北海道経済の全面的な後退は、札幌市への一極集中とそれ以外の地域社会の疲弊（崩壊と言いうる場所もある）をもたらしている。この社会的格差が地域的な分化として北海道では現象していることを意識し、（集中化を遂げる）札幌市、（周辺化・縁辺化の急速に進む空知地域の中から）夕張市、（基幹産業が総崩れの状態にある中規模都市の中から）釧路市を対象とした。

計画の大部分を実現できたとはいえ、実現できなかったものをある。詳しくは「調査経過一覧」に譲るが、その見取り図を整理しておく。

［札幌市の調査とその成果］

①若年の新規学卒労働市場の変化を明らかにするために、労働関係機関の調査

北海道若年者就職支援センターに対する聞き取り調査、ヤングハローワークに対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

②教育委員会の進路指導・キャリア教育政策に関する調査

北海道教育委員会に対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

③高等学校における進路指導・キャリア教育の実践に関する調査

その中でも現在の進路指導・キャリア教育の焦点は普通科進路多様校にあることを考慮し、北海道札幌白陵高等学校と北海道札幌東豊高等学校に対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

④普通科進路多様校の生徒の進路志向と学校生活に関する調査

北海道札幌白陵高等学校と北海道札幌東豊高等学校の生徒に対するアンケート調査を行った。

④キャリア教育の陶冶的原理を考察のための調査（「勉強と課外活動の両立問題」）

北海道札幌西高等学校に対する聞き取り調査と生徒に対するアンケート調査を行った（この調査は、もともと釧路市の地方進学校との進路志向の地域間格差を明らかにする意図で始められた）。

これらの結果は、まだ活かしきっていないところも多い。研究成果や報告書として文章となったものを指摘しておく。また、浅川この報告書の第１章「公立進学校における進路

志向の地域差――課外活動との関連から」がそれにあたっている。これは、札幌への一極集中とそれ以外の地域社会の崩壊が、進学校の進路指導や生徒の進路志向にどのような影響を与えたのかに関わる詳細な分析となっている。さらに、「報告書　『進路多様校における高校生の意識と生活』に関する調査」がある。これはまだ分析途上にある北海道札幌東豊高等学校調査の分析と合せて、比較検討するつもりである。

ところで、北海道の進路指導・キャリア教育に関する改善は普通科進路多様校に軸則を移しているが、この2校は北海道教員委員会の「北海道高等学校（普通科）キャリア教育推進事業」の対象校でもある。北海道教員委員会に対する聞き取り調査とも合せて検討したい。

［夕張市の調査とその成果］

夕張市において、若者の社会的自立を支える四つの領域の検討をするために、地域調査を積極的に行った。

①夕張市の教育政策に関する調査

夕張市教育委員会に対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

②高校進路指導実践に関する調査

北海道夕張高等学校への聞き取り調査を行った。

③高校生の将来志向と地元つながりに関する調査

生徒へのアンケート調査を行った。

④「社会的自立」の基盤に関する調査

夕張市の各種の事業所や農業協同組合・農業生産組合に対する調査を行い、資料の提供を受けた。これは夕張高校OB・OGに対する調査の予備調査の意味も持っていた。

⑤ノンエリート青年の社会的自立に関する調査

北海道夕張高等学校等のOB・OGに対する各種のインタビュー調査を行った。

⑥中学校の生徒指導と進路指導に関する調査

北海道においては受験競争の早期化に伴い、高校受験時に地域から札幌市等への流出が目立っている。夕張市においては学校統廃合が進められ、高校教育を受ける前に市から流出している。この実態を把握するため、中学校に対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

⑥高校生の進路意識の形成過程に関する調査

それを明らかにするために、夕張市立夕張中学校の2年生に関してアンケート調査を行った。

これらは、「『財政再建団体』指定以降の夕張市の現状――高齢者調査をてがかりとして」や「学校統廃合による中学生の生活と意識の変化――北海道旧産炭地A中学校を事例に」で分析した。報告書としては、「報告書　学校統合による生徒の意識の変化に関する調査」である。

さらに北海道夕張高等学校調査を核として、本研究の課題のひとつであった「移行プロセス」とその下でのノンエリート青年の社会的自立の検討を行うことができた。これは窪田玲奈の諸論稿がそれにあたる。「夕張で暮らす若者たちの地元志向・地元つながり」、「“地方の地方”における若者の『地元つながり』―夕張高校OB・OG調査を基に－」、

そして本報告書の第２章がそれにあたる。

本研究では、日本社会はこれまで、「移行プロセス」支援の社会資本を企業と学校に集中していたがこれが危機に瀕し、北海道では特に、家族・地域社会と学校・企業の四者が欠けた危機的な状況にあると考えていた。窪田は、ノンエリート青年の社会的自立を育むものとして、青年通しの支え合いを「地元つながり」として明らかにし、高校時代の学校生活がそれを育てていたことを明らかにした。

［釧路市の調査とその成果］

釧路市の調査は、教育関係機関や生徒調査が主なものとなった。社会的自立の基盤まで、調査を進めることができなかった。札幌市や夕張市との比較群のような意味合いである。しかし他方で、中学生のアンケート調査を行うことができたので、地域的な疲弊が高校時代の進路指導・キャリア教育や進路志向にどのような影響を与えるのかという点では、かなり具体的に把握することができた。

①釧路市の教育政策に関する調査

釧路市教育委員会に対する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

②市立中学校の生徒指導に関する調査

釧路市の中学校５校に対する生徒指導実践に関する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

③中学生の進路志向・将来志向に関する調査

釧路市立中学校３校の2年生を対象としたアンケート調査を行った。

④高等学校の進路指導・キャリア教育実践に関する調査

北海道立の高等学校５校に対する進路指導・キャリア教育に関する聞き取り調査を行い、資料の提供を受けた。

⑤高校生の進路志向と学校生活に関する調査

地方進学校１校の生徒に対するアンケート調査を行った。

これらについては、「疲弊する地域における中学生の生活と意識――釧路市の中学2年生を対象に」と本報告書の第１章に詳しい。

当初の計画を拡張した点と縮小した点があり、計画立案時点で予想した結果とは異なるところもある。変更を必要とした根拠を列挙する。

第一に、当初の予想よりもはるかに地域格差を重視する必要があった。特にそれが生徒の進路志向に早期の分化をもたらしている、という知見は重要であると思われる。生徒は、従来において、進路に関する具体的なイメージを高校に入って育むことができると考えられたが、これに地域格差が大きく影響していた。札幌市の高校生は、全体的に、いまだ「ゆとりある」状況にある。確かに、受験競争の影響の早期化は生じていると考えられるが大学定員の余剰もあり、生徒にとっての最後の学校生活は高校生活（高校止まり）ではない。これは釧路市との著しい違いとなった。これらのことは、高校時代の進路指導・キャリア教育の困難の度合いを決定的に変える。

第二に、進路指導・キャリア教育の力点が普通科進路多様校に移り、同時にそれぞれの高校における実践が北海道の高校多様化（「特色のある高校づくり」）の影響を受け、多様

化している点であった。より、それぞれの学校の事情（学力問題や生徒指導問題）を考慮する必要があった。

第三に、夕張市を事例に、「移行プロセス」・社会的自立を、ノンエリート青年の主体的要因を基礎に、地域の家族・企業・文化に踏み込み実態解明を試みた。「血縁」については家族の差が大きかった。「職業縁」や「社縁」は、福祉職の専門職労働市場や企業社会の実在の大きさが重要であった。地縁はもはや「イメージ」的な影響力となっていた。しかしながら、過去の学校生活に由来する「地元つながり」は、様々な機会に喚起されていた。このような意味で、高校は行った直接的な教育実践としてよりは、生徒にとっての生活共同の「記憶」の意味をもち、その影響力は無視できないと思われる。

第四に、キャリア教育の陶冶的原理は、「未来の目標構築が現在の生活の規律化を進めること」にあると考えられる。従来のキャリア教育では、進路指導の場面（大学受験や就職等の「出口」）を思考のテコとして展開が模索された（近年は、学習意欲と関連させようとしている）。しかし、これとは別の回路でも、陶冶的原理の実践は模索可能であるように思える。釧路市の公立進学校の進路指導実践と生徒の進路志向の比較対象のために、札幌市の公立進学校の研究を行ったが、ここでは課外活動との両立が重要な意味をもっていた（本報告書第１章）。このことは、学校における教育実践にどのような意味をもつのか、に注目する必要がある。

第五に、当初予測したよりもはるから大きな地域格差を考慮に入れるならば、これからの進路指導・キャリア教育が対応を迫られるのは同じ高等学校であっても、その位置づけは異なると考えられる。進路指導・キャリア教育は、大学入試を目標とできる高等学校で必要となるのではなく、最後の学校生活となる高校で必要となる可能性が、そう遠くない将来に現れるだろうと予測できる。「完成教育」としての後期中等教育を念頭においた時に、進路指導・キャリア教育はどのような課題を、どのような方法で背負わなければならないのだろうか。これには具体的な地域格差が関わるので、具体的な地域を対象として検討されなければならないだろう。

本研究の組織・研究成果等一覧

○　研究組織

研究代表者　　浅川　和幸（北海道大学大学院教育学研究院准教授）
研究協力者　　窪田　玲奈（北海道大学大学院教育学院博士後期課程）

○　研究経費

平成２２年度　　650 千円（内間接経費 150 千円）
平成２３年度　　390 千円（内間接経費 90 千円）
平成２４年度　　520 千円（内間接経費 120 千円）

○研究成果・発表一覧

［研究論文］

- 浅川和幸、2011 年、「『財政再建団体』指定以降の夕張市の現状--高齢者調査をてがかりとして」（査読無し）、『教育学の研究と実践』（特集フォーラム）、６、5～12 頁
- 浅川和幸、2012 年、「疲弊する地域における中学生の生活と意識--釧路市の中学 2 年生を対象に」（査読無し）、『教育学の研究と実践』（特集フォーラム）、７、5～14 頁
- 浅川和幸、2012 年、「学校統廃合による中学生の生活と意識の変化—北海道旧産炭地Ａ 中学校を事例に」（査読無し）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』、117、1～31 頁
- 窪田玲奈、2011 年、「夕張で暮らす若者たちの地元志向・地元つながり」（査読無し）、『教育』(5 月号)、国土社、98-105 頁
- 窪田玲奈、2012.06、「“地方の地方”における若者の『地元つながり』—夕張高校ＯＢ・ＯＧ調査を基に—」（査読付）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（第 115 号）、北海道大学大学院教育学研究院、17-56 頁
- 窪田玲奈、2012.12、「地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ—夕張を担う地元企業・機関の調査から—」（査読無し）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（第 117 号）、北海道大学大学院教育学研究院、113-130 頁

［報告書］

- 浅川和幸・伊藤麻貴、2011 年、「報告書　学校統合による生徒の意識の変化に関する調査」、1～24 頁
- 浅川和幸、2011 年、「報告書　中学生の生活スタイルと意識に関する調査」、1～30 頁
- 浅川和幸、2012 年、「報告書　『地方進学校に通う生徒の学校生活と進路意識』に関する調査」、1～51 頁

・　浅川和幸、2012 年、「報告書　『進路多様校における高校生の意識と生活』に関する調査」、74～83 頁

［学会発表］

・　浅川和幸、2011 年 3 月、「『財政再建団体』指定以降の夕張市の現状」、北海道教育学会第 55 回研究発表大会、北海道教育大学釧路校
・　浅川和幸、2012 年 3 月、「学校統合による中学生の生活と意識の変化」、北海道教育学会第 56 回研究発表大会、北海道大学
・　浅川和幸、2013 年 3 月、「公立進学校における課外活動と進路志向――札幌圏の進学校と地方進学校との対比を素材として」、北海道教育学会第 57 回研究発表大会、名寄市立大学
・　窪田玲奈、2011 年 10 月、「夕張で暮らす若者達の生きられる空間」、唯物論研究協会第 34 回研究大会、札幌
・　窪田玲奈、2011 年 11 月、「地域での若者の地元つながりの今日的意味」（課題研究分科会「Ⅱ子どもの育ちを支える地域からの共同」）、日本臨床教育学会第 1 回研究大会、札幌
・　窪田玲奈、2012 年 3 月、「地方都市における若者の地元志向―夕張高校ＯＢ・ＯＧ調査を基に―」、北海道教育学会第 56 回研究発表大会・自由研究発表、札幌
・　窪田玲奈、2012 年 8 月、「地方都市における若者の地元志向の変遷―過去の語り直しからの考察―」（テーマ型研究発表 B-6　若者の移行過程変容と学校）、日本教育学会第 71 回大会、名古屋
・　窪田玲奈、2013 年 3 月、「地域における主力産業を担う若者の進路形成―夕張メロン生産組合・青年部所属の方への調査を基に―」、北海道教育学会第 57 回大会・自由研究発表、北海道・名寄

第１章　公立進学校における進路志向の地域差――課外活動との関連から

浅川　和幸

【目　次】

Ⅰ．はじめに
　１．本発表の問題意識と目的
　２．方法
　３．調査対象
Ⅱ．公立進学校における進路状況と進路指導の地域差
　１．入学時点の学力の比較
　２．進路決定状況の比較
　３．背景としての進路指導と地域格差
Ⅲ．学校生活における諸活動への注力と進路志向の地域差
　１．学校生活注力型の設定
　２．学校生活注力型という視角からの比較
　３．進路志向の比較
Ⅳ．札幌市の公立進学校Ｓ高校における課外活動の現状
　１．課外活動への全体的な参加状況と区別
　２．熱心な課外活動の質的特徴
　３．課外活動と進路志向
　４．課外活動と学校生活における注力の関係
Ⅴ．まとめ

Ⅰ．はじめに

１．問題意識と目的

キャリア教育は、その導入時点から大きく性格を変えてきている[1]。概括的に述べるなら、①勤労観・職業観を形作るものとして、②職業教育と併置されて社会的な自立を果すためのものとして、そして現在の③「生きる力」や学力を育てるためのものである。このように整理するなら、キャリア教育は「生きる力」を育てるために、より広い教育の領域と関わって考えられる必要があることを意味しよう。

本稿は、２つの目的をもつ。ひとつは、北海道の公立進学校の進路実績と生徒の進路志向を、地域差の観点から明らかにすることである。札幌市の公立進学校Ｓ高等学校（以下、簡単に高校とする）と地方都市の公立進学校Ａ高校を比較する。両者の地域差は、進路指導のあり方に違いをもたらし、それは生徒の進路志向にも大きく影響していた。もうひとつは、Ｓ高校に限定した生徒の進路志向と課外活動の関係の分析である。Ｓ高校では課外

[1] 浅川和幸、2010年、「北海道におけるキャリア教育の現状と課題」、『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、第５号、29～38頁

活動が非常に盛んであるが、進路指導において、進路実現だけではなく、課外活動と勉強との両立をどのように勝ち取らせるかが重要になってきた。両立が難しいと考えられる熱心な課外活動における生徒の両立を達成するための試みにおいて、「生活時間の組織化」の工夫としてどのようなことが取り組まれていたのかを明らかにする。キャリア教育は、自己陶冶の原理（「未来の目標構築が現在の生活の規律化を進めること」）を生徒の内部に形成することにあるが、課外活動がこのことに大きく関わっていたことを示唆する。

ところで進路志向高校教育において課外活動は、生徒の学校生活において大きな位置を占める。しかしながら、制度的な位置づけは曖昧で、学校によって取り組みは大きく異なる。

西島央は、『部活動　その現状とこれからのあり方』[2]において、部活動は、「学校のさまざまな教育活動と関連づけて議論することはなかった」が、「生徒指導や進路指導の場としても大切な役割を果すほど、中学生・高校生の学校生活に深く組み込まれている活動となっている」（7頁）と書いている。しかしながら、現時の高校教育において課外活動がどのように行われているのか、高校生はどのように取り組んでいるのかを明らかにした研究は少ない。さらに、時代的な関心（2000年代以降の新自由主義教育改革期において、競争的な教育体制が全体的に弛緩しつつ二極化しつつある）と結びつけて、考察したものはない。

本稿は、この時代的な関心を、進路指導の地域間格差の問題と結びつけて、「課外活動と進路指導の関係」と「それがもっている意味」を明らかにする。

2．方法

第1に、公立進学校の課外活動と進路指導の関係を、高等教育へのアクセスの地域格差の観点から比較検討する。比較は主に、進路状況に関するデータと生徒に行ったアンケート調査の項目を利用した学校生活の注力類型の比較から行う。第2に、札幌市の公立進学校S高校の課外活動の事例研究を、アンケート調査の項目から幾つかの指標を作成し、質的な検討を行う。

3．調査対象

S高校とA高校に、生徒に対するアンケート調査と学校への聞き取り調査を行い、進路指導関係のデータの提供を受けた。ここでは、主にアンケート調査の分析結果を、検討の素材とする。調査概要は、以下の通りである。共に高校3年生を調査したものであるが、若干実施時期が異なる。S高校は11月中旬、A高校は9月の中旬になる。

また、S高校においては、学校で教員が配布し、家庭で記入の上、学校でホームルームの時間に回収した。A高校においては、総合的な学習の時間に教員が配布し、その場で記入し、教員が回収した。この手続きの違いが、回収率に影響していると思われる。

---

[2] 学事出版 2006年

調査概要

S高校3年生生徒アンケート調査結果(2012年11月中旬実施)

	人数(名)	内訳(%)
生徒数	317	100.0
調査票返送数	290	91.5
部分記載等で除外	24	7.6
有効票	266	83.9

※ S高校は札幌市の進学トップ校

A高校3年生生徒アンケート調査結果(2011年9月中旬実施)

	人数(名)	内訳(%)
生徒数	241	100.0
調査票返送数	230	95.4
部分記載等で除外	2	0.8
有効票	228	94.6

※ A高校は北海道の有名地方進学校

基礎データ

S高校	男子115名 女子151名	不明0名
	文系131名 理Ⅰ系124名 理Ⅱ系10名	不明1名

A高校	男子114名 女子113名	不明1名
	文系81名 理系139名	不明8名

II．公立進学校における進路状況と進路指導の地域差

1．入学時点の学力の２校比較（図表１）

図表1　S高等学校とA高等学校の生徒の入試時点での学力の比較(2012年度)

	学科	「道コン」のSS	内申点
S高校	普通科	65.7	295
A高校	非職業系専門学科	64.8	306
	普通科	60.2	281

※「北海道学力コンクール(道コン)」事務局作成資料
(『道新受験情報2012秋号』北海道新聞社)

図表１は、入学時点での学力を「北海道学力コンクール（道コン)」の成績と、内申点で比較したものである。若干Ｓ高校の方が高いが、それほど大きな差がない。そしてＡ高校は、学科が二つあり、非職業系専門学科の「北海道学力コンクール（道コン)」の成績（ＳＳ）はＳ高校に匹敵するが、普通科の成績ではだいぶ劣る。このため、Ａ高校の生徒の学力の幅は、Ｓ高校より広いと考えられる。

2．進路決定状況の比較

図表2　S高校進路決定状況

	卒業者数	就職希望者数	進学希望者数	決定者数									未決定者(含浪人)
				大学			準大学(大学校)	専修各種	短大	公務員	民間就職	合計	
				国公立	私立	小計							
平成22年度	319	0	319	129	37	166	4		0	0	0	170	149
平成23年度	314	0	314	146	34	180	1	5	1	0	0	187	127
平成24年度	322	0	322	128	43	171	0	3	0	0	0	174	148

※　平成22年度は、準大学と専修各種を合せたカテゴリーであった。

図表3　A高校進路決定状況

	卒業者数	就職希望者数	進学希望者数	決定者数									未決定者(含浪人)
				大学			準大学(大学校)	専修各種	短大	公務員	民間就職	合計	
				国公立	私立	小計							
平成22年度	277	4	273	117	80	197	1	22	2	3	0	225	52
平成23年度	277	8	269	113	75	188	2	20	3	4	4	221	56
平成24年度	241	4	237	90	67	157	0	16	5	4	0	182	59

図表２・３は、両校の３年間の進路決定状況をみたものである。Ｓ高校は進学希望者のみである。Ａ高校は就職希望者が若干いる。一見してわかるのは、「未決定者（含浪人)」の数の違いである。

この３年間のうち、平成24年度卒業生について絞って比較したのが図表４である。

図表4　「平成24年度卒業生の進路内訳」の2校比較

		卒業者数	就職希望者数	進学希望者数	決定者数									未決定者(含浪人)
					大学			準大学(大学校)	専修各種	短大	公務員	民間就職	合計	
					国公立	私立	小計							
S高校	度数(名)	322	0	322	128	43	171	0	3	0	0	0	174	148
	内訳(%)	100.0	0.0	**100.0**	39.8	13.4	53.1	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	54.0	**46.0**
A高校	度数(名)	241	4	237	90	67	157	0	16	5	4	0	182	59
	内訳(%)	100.0	1.7	98.3	37.3	27.8	65.1	0.0	**6.6**	**2.1**	**1.7**	0.0	75.5	**24.5**

※　強調点を太字にした。

進路決定状況は、進学希望者の中での大学の多さ、「未決定者（含浪人）」の割合で異なる。

S 高校は、進学希望者が 100%であるが、そのうち「未決定者（含浪人）」が非常に多い（46.0%）。そして大学進学は、国公立大学が多い（39.8%）。

A 高校は、就職希望者が若干いる。そして進学希望者のうち「未決定者（含浪人）」が少ない（24.5%）。また、専修・各種学校や短大の進学者もいる。S 高校とは、進路の大学への収斂度が異なる。そして大学のうち私立大学が多い（27.8%）。

3．背景としての進路指導と地域格差

A 高校は、北海道の地方都市にある。家計への負担と予備校による学力の底上げが難しい（A 市に有力な予備校がない。有力な予備校に通わせるには札幌市等の予備校が集中している場所で、下宿等をしなければならない）ことから、浪人は困難であると学校と保護者だけではなく、生徒自身も判断している。

A 高校は、①高校入学前から「現役合格」を重視した進路指導、②大学における進路実績や卒業後の進路実現を見越した形での大学選択を促す指導、③高校の三年間で学力をひき出すための学習モチベーションの調達、④保護者に対する進路関係の潤沢な情報提供と懇談の緻密な実施、を行っている。この観点から、札幌市の国立総合大学は、ブランドではあっても、就職をさせる力に乏しく、浪人して進学するほどのものではない、と判断していた（進路指導部調査の聞き取り調査から）。

他方で、S 高校の進路指導は、札幌市の国立総合大学合格を狙いとした旧来的なものである。近年、私立大学進学では首都圏への進学も勧めている。そして「未決定者（含浪人）」を回避するような強力な指導を行っていない。

分析を先取すると、このような環境は生徒の進路志向を以下のように形作るように影響する。

S 高校の生徒は、札幌市にある地の利を活かし、進学を前提としつつも、浪人も視野に入れ、高校生活を「謳歌」している。「余裕」があると言っても良い。

A 高校の生徒は、地方に居住する不利を意識し、浪人できない、すなわち「現役合格」を目標に勉強に邁進せざるをえない。その意味で、（自分を）「追いつめる／追いつめられる」。しかし、この道は厳しく、高校生活の途中で、学習モチベーションの点で生徒に分化が生じている。

A 高校の進路指導の背景の一端を、別の角度から見ておきたい。

図表5　A市中学校2年生9月時点の進路希望

	度数(名)	内訳(%)
卒業後就職	2	1.0
高校まで進学	**89**	**44.7**
四年制大学まで進学	21	10.6
短大まで進学	10	5.0
専門学校まで進学	26	13.1
大学院まで進学	7	3.5
未定	44	22.1
合計	199	100.0

※　2011年度A市3中学の生徒のアンケート調査による。

図表５が示すように、A 高校が所在する A 市の中学校 2 年生の進路希望において、4 年制課程大学以上の高等教育へ進学する希望をもった生徒は少ない。A 市の中学校では 2 年生の時点で、半分に近い生徒が「高校生活が最後の学校生活（高卒止まり）」と考えている[3]。

A 高校に進学を希望するような生徒は、そうではない一部の生徒である。高等教育への進学意志が最初から分化しているとも言える。そして近辺に同じような進学校はなく、札幌市におけるような競争や刺激にさらされていない。

このような事情が、A 高校の進路指導部に、大学卒業後の進路さえも見据えた強力な進路指導を行わせる動機となっている。実際、入学前の学校説明会の時点において、保護者に、3 年後を見据えて学資を蓄えることを強調している。

[3] 浅川和幸、2012 年、「疲弊する地域における中学生の生活と意識—釧路市の中学校 2 年生を対象に」、『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、第 7 号。

Ⅲ．学校生活における諸活動への注力と進路志向の地域差

１．学校生活の分析――学校生活注力型の設定

生徒の学校生活を比較するために、学校生活の諸活動への注力の割合を聞く設問を作成し、それの結果を分析した。それを分類し、学校生活注力型を設定した。図表６に類型設定の具体的なやり方を記述した。

図表6　学校生活注力型の設定

[型の元となる数字]

学校生活で注力している度合いを、全体を10割として、以下の四つのカテゴリーで質問した。

勉強		課外活動		友人関係		趣味		学校生活への注力全体
□割	＋	□割	＋	□割	＋	□割	＝	10割

この数字を以下の原則で分類した。

[分類の原則]

①「5」(割、以下省略)を超えるものは、「5＋5」以外は、そのカテゴリーの中心型とした。

②「5＋5」、「5＋4」、「4＋4」、「4＋3」のように二つのカテゴリーに集中する(それ以外のものは2以下)場合は、「カテゴリー」＋「カテゴリー」の両立型とした。どちらの数が多いかは問題としない。

③②のうち「4」＋「3」＋「3」を、例外的にマルチ型に分類した。

④「4」以上がひとつもない場合は、4つのカテゴリーに分散しているので「マルチ型」とした。

２．学校生活注力型という視角からの比較

この注力類型を用いて２校の生徒の学校生活の特徴をみる。

①学校注力型の２校比較（図表７）

図表7　「学校生活注力型」の2校比較

類型	S高校		A高校	
	度数(名)	内訳(%)	度数(名)	内訳(%)
勉強中心型	36	13.5	**97**	**42.5**
課外活動中心型	**48**	**18.0**	22	9.6
友人関係中心型	5	1.9	3	1.3
趣味中心型	28	10.5	14	6.1
勉強＋課外活動型	21	7.9	13	5.7
勉強＋友人関係型	17	6.4	16	7.0
勉強＋趣味型	6	2.3	9	3.9
課外活動＋友人関係型	20	7.5	9	3.9
課外活動＋趣味型	8	3.0	3	1.3
友人関係＋趣味型	12	4.5	1	0.4
マルチ型	**62**	**23.3**	38	16.7
N.A.	3	1.1	3	1.3
計	266	100.0	228	100.0

ひとつの活動に注力する型は 4 つできる。「勉強中心型」、「課外活動中心型」、「友人関係中心型」、「趣味中心型」である。さらに二つの活動に注力する型は 6 つできる。「勉強

＋課外活動型」、「勉強＋友人関係型」、「勉強＋趣味型」、「課外活動＋友人関係型」、「課外活動＋趣味型」、そして「友人関係＋趣味型」である。そして三つ以上の活動に注力を分散する「マルチ型」である。

このそれぞれの型の構成比をみると、大きな違いがあることがわかる。

A 高校は、「勉強中心型」が明らかに多い（42.5%）。約半数を占める。これに次ぐのは、「マルチ型」の 16.7%となる。S 高校は、「マルチ型」（23.3%）、「課外活動中心型」（18.0%）、「趣味中心型」（10.5%）と分散する。「勉強中心型」は、A 高校に比べて少ない（13.5%）。

この「勉強中心型」の構成比の違いが両校の違いである。

②学校注力型の男女差（図表８）

図表8　「学校生活注力型×性別」の2校比較

		S高校			A高校		
		性別		合計	性別		合計
		男子	女子		男子	女子	
勉強中心型	度数(名)	17	19	36	45	52	97
	内訳(%)	47.2	52.8	100.0	46.4	53.6	100.0
課外活動中心型	度数(名)	**25**	23	48	9	**13**	22
	内訳(%)	**52.1**	47.9	100.0	40.9	**59.1**	100.0
友人関係中心型	度数(名)	0	5	5	2	1	3
	内訳(%)	0.0	100.0	100.0	66.7	33.3	100.0
趣味中心型	度数(名)	**15**	13	28	**9**	4	13
	内訳(%)	**53.6**	46.4	100.0	**69.2**	30.8	100.0
勉強＋課外活動型	度数(名)	5	**16**	21	4	**9**	13
	内訳(%)	23.8	**76.2**	100.0	30.8	**69.2**	100.0
勉強＋友人関係型	度数(名)	6	**11**	17	**9**	7	16
	内訳(%)	35.3	**64.7**	100.0	**56.3**	43.8	100.0
勉強＋趣味型	度数(名)	3	3	6	5	4	9
	内訳(%)	50.0	50.0	100.0	55.6	44.4	100.0
課外活動＋友人関係型	度数(名)	5	**15**	20	6	3	9
	内訳(%)	25.0	**75.0**	100.0	66.7	33.3	100.0
課外活動＋趣味型	度数(名)	4	4	8	2	1	3
	内訳(%)	50.0	50.0	100.0	66.7	33.3	100.0
友人関係＋趣味型	度数(名)	4	**8**	12	1	0	1
	内訳(%)	33.3	**66.7**	100.0	100.0	0.0	100.0
マルチ型	度数(名)	31	31	62	20	18	38
	内訳(%)	50.0	50.0	100.0	52.6	47.4	100.0
合計	度数(名)	115	148	263	112	112	224
	内訳(%)	43.7	56.3	100.0	50.0	50.0	100.0

※　小類型の度数(名)が10を超えるもので、平均と5%以上の差があるものの大きい方を太字にした。

両校に共通するのは「趣味中心型」で男子が多いこと（S 高校 53.6%、A 高校 69.2%）、「勉強＋課外活動型」で女子が多いこと（S 高校で 76.2%、A 高校で 69.2%）である。

両校で異なるのは、「課外活動中心型」と「勉強＋友人関係型」で男女の比率が対照的になっている。「課外活動中心型」は、S 高校で男子に多く、A 高校で女子に多い。「勉強＋友人関係型」は、その逆である。さらに S 高校では、「課外活動＋友人関係型」や「友

人関係＋趣味型」が女子に多い。

A 高校では学校生活注力型が「勉強中心型」に収斂していた。そのため顕著な特徴が出ないが、女子は課外活動を軸に特徴が現れる（「課外活動中心型」、「勉強＋課外活動型」）、男子は、「趣味中心型」に特徴があるのかもしれない。

S 高校の場合は、男女差が顕著に現れる形となる。男子は、ひとつのことに打ち込むタイプのもの（「課外活動中心型」や「趣味中心型」）に特徴がある。女子は、友人関係を軸としながら、両立する型（「勉強＋友人関係型」、「課外活動＋友人関係型」、「友人関係＋趣味型」、そして「勉強＋課外活動型」）に特徴がある。

③学校生活注力型の類型への再整理とそれを用いた 2 校比較（図表 9）

ここまで検討してきた学校生活注力型は、全体で 11 型あるために複雑である。また、生徒数が少ないものもある。そのため、集約する。以下のような第Ⅰ類型から第Ⅴ類型までの、5 類型にまとめた。

第Ⅰ類型（勉強中心型）は、「勉強中心型」をそのまま類型として使用する。

第Ⅱ類型は、学校生活における注力の柱のひとつを勉強におき、さらにもうひとつの活動を注力の柱とする型（「勉強＋課外活動型」、「勉強＋友人関係型」、「勉強＋趣味型」）をまとめる。第Ⅱ類型（勉強両立型）とした。

第Ⅲ類型は、学校生活における注力の柱を課外活動におくが、それから「勉強＋課外活動型」を除き、「課外活動中心型」、「課外活動＋友人関係型」、「課外活動＋趣味型」をまとめて、第Ⅲ類型（課外活動型）とした。

第Ⅳ類型は、学校生活における注力を分散させている「マルチ型」をそのまま類型として使用した。第Ⅳ類型（マルチ型）である。

第Ⅴ類型は、学校生活における注力の柱が勉強と課外活動にない型（「友人関係中心型」、「趣味中心型」、「友人関係＋趣味型」）をまとめた。第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外）とした。この類型の構成比を比較したのが図表 9 である。

図表9　「学校生活注力類型の整理」と2校比較

			S高校			A高校		
			度数(名)	内訳(%)	小計	度数(名)	内訳(%)	小計
第Ⅰ類型	勉強中心型		36	13.5	13.5	97	42.5	**42.5**
第Ⅱ類型	勉強両立型	勉強＋課外活動型	21	7.9	16.5	13	5.7	16.7
		勉強＋友人関係型	17	6.4		16	7.0	
		勉強＋趣味型	6	2.3		9	3.9	
第Ⅲ類型	課外活動型	課外活動中心型	48	18.0	**28.6**	22	9.6	14.9
		課外活動＋友人関係型	20	7.5		9	3.9	
		課外活動＋趣味型	8	3.0		3	1.3	
第Ⅳ類型	マルチ型		62	23.3	23.3	38	16.7	16.7
第Ⅴ類型	勉強・課外活動以外	友人関係中心型	5	1.9	16.9	3	1.3	7.9
		趣味中心型	28	10.5		14	6.1	
		友人関係＋趣味型	12	4.5		1	0.4	
N.A.			3	1.1	1.1	3	1.3	1.3
計			266	100.0	100.0	228	100.0	100.0

※ 10%を超える差があるものを太字にした。

S 高校は、学校注力類型が分散する。多い順に、第Ⅲ類型（課外活動型）、第Ⅳ類型（マ

ルチ型)、第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型)、第Ⅱ類型（勉強両立型）となる。類型の中で第Ⅰ類型（勉強中心型）が最も少ない。

A 高校は、第Ⅰ類型（勉強中心型）が圧倒的に多い（42.5%)。そして第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）が少ないが、それ以外は並んでいる。

④学校生活注力類型と性別（図表１０）

図表10　「性別×学校生活注力類型」の2校比較

			学校生活注力類型					合計
			第Ⅰ類型（勉強中心型）	第Ⅱ類型（勉強両立型）	第Ⅲ類型（課外活動型）	第Ⅳ類型(マルチ型)	第Ⅴ類型(勉強・課外活動以外型)	
S高校	男子	度数(名)	17	14	34	**31**	19	115
		内訳(%)	14.8	12.2	29.6	**27.0**	16.5	100.0
	女子	度数(名)	19	**30**	42	31	26	148
		内訳(%)	12.8	**20.3**	28.4	20.9	17.6	100.0
	合計	度数(名)	36	44	76	62	45	263
		内訳(%)	13.7	16.7	28.9	23.6	17.1	100.0
A高校	男子	度数(名)	45	18	17	20	**12**	112
		内訳(%)	40.2	16.1	15.2	17.9	**10.7**	100.0
	女子	度数(名)	**52**	20	17	18	5	112
		内訳(%)	**46.4**	17.9	15.2	16.1	4.5	100.0
	合計	度数(名)	97	38	34	38	17	224
		内訳(%)	43.3	17.0	15.2	17.0	7.6	100.0

※　類型の度数(名)が10を超えるもので、男女差が5%以上違うもので大きい方を太字にした。

ふたたび性別で比較してみる。

A 高校は、第Ⅰ類型（勉強中心型）に収斂していた。男女で 5%を超える差があるものをみると、第Ⅰ類型（勉強中心型）で女子が多く、第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）で男子が多い。

同様の基準でみると S 高校は、第Ⅱ類型（勉強両立型）で女子が多く、第Ⅳ類型（マルチ型）で男子が多い。

以上のような分析から、A 高校はよく勉強する高校、S 高校はそうではないという印象を受ける。はたしてそうかを、勉強時間の観点からみてみよう。

⑤学校生活注力類型と週あたり勉強日数（図表１１）

類型の構成比という点では、A 高校において、第Ⅰ類型（勉強中心型）が圧倒的に多かった。しかし類型として比較すると、週あたり勉強日数は、第Ⅰ類型（勉強中心型）ではあまり差がないことがわかる。ところが第Ⅱ～Ⅴ類型には、大きな差がある。

A 高校では第Ⅱ～Ⅴ類型、すなわち学校生活において勉強への注力が減ると、週あたり勉強日数は、明らかに減る傾向にある。第Ⅲ類型（課外活動型）や第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）は、「週に６・７日」勉強する生徒は３割台となる。第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）では、「週に０日」が４割に迫る。

逆に、S 高校では第Ⅲ・Ⅳ類型において、学校生活における注力が勉強に向けられなくても、週あたり勉強日数は余り減っていない。確かに第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）

は、他の類型に比して週あたり勉強日数を減らしているが、それでもＡ高校と比べると勉強していると言える。

図表１１　「学校生活注力類型×週あたり勉強日数」の2校比較

			週の勉強日数					合計
			週に0日	週に1日	週に2・3日	週に4・5日	週に6・7日	
第Ⅰ類型（勉強中心型）	S高校	度数（名）	1	0	1	1	33	36
		内訳(%)	2.8	0.0	2.8	2.8	91.7	100.0
	A高校	度数（名）	3	0	2	6	86	97
		内訳(%)	3.1	0.0	2.1	6.2	88.7	100.0
第Ⅱ類型（勉強両立型）	S高校	度数（名）	0	1	0	1	**42**	44
		内訳(%)	0.0	2.3	0.0	2.3	**95.5**	100.0
	A高校	度数（名）	1	2	1	4	30	38
		内訳(%)	2.6	5.3	2.6	10.5	78.9	100.0
第Ⅲ類型（課外活動型）	S高校	度数（名）	2	0	1	12	**61**	76
		内訳(%)	2.6	0.0	1.3	15.8	**80.3**	100.0
	A高校	度数（名）	4	2	**6**	**9**	13	34
		内訳(%)	11.8	5.9	**17.6**	**26.5**	38.2	100.0
第Ⅳ類型（マルチ型）	S高校	度数（名）	2	0	1	4	**55**	62
		内訳(%)	3.2	0.0	1.6	6.5	**88.7**	100.0
	A高校	度数（名）	3	0	3	**12**	19	37
		内訳(%)	8.1	0.0	8.1	**32.4**	51.4	100.0
第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）	S高校	度数（名）	4	0	3	9	**29**	45
		内訳(%)	8.9	0.0	6.7	20.0	**64.4**	100.0
	A高校	度数（名）	**7**	1	1	3	6	18
		内訳(%)	**38.9**	5.6	5.6	16.7	33.3	100.0
全体	S高校	度数（名）	9	1	6	27	**220**	263
		内訳(%)	3.4	0.4	2.3	10.3	**83.7**	100.0
	A高校	度数（名）	18	5	13	34	154	224
		内訳(%)	8.0	2.2	5.8	15.2	68.8	100.0

※　この勉強日数は、学習塾やテスト前の特別な時期を除いた普段の場合。
※　2校の間で10%を超える差があるもので大きい方を太字にした。

すなわち、学校生活注力類型の違いによって、勉強へのモチベーションがＡ高校は鋭く分化するが、Ｓ高校ではしていないのである。学校生活における注力のあり方は、週あたり勉強日数には直接的に効きにくいような学校生活の質をもっていると言える。

これには様々な要因が関わっていると考えられる。ここまでの分析からは、Ｓ高校の卒業生の進路の特徴であった、「浪人」はしても大学進学には強く動機づけられていることを上げることができるだろう。また、Ｓ高校は札幌市にあり、日常的に他の同程度の進学校と、進学において競争関係にあることを、生徒も常々意識しているに違いないことを指摘しても大過はあるまい。保護者の期待も違うと考えられる。

⑥学校生活注力類型と成績（自己評価）（図表１２）

図表12　「学校生活注力類型×成績(自己評価)」の2校比較

			現在の成績(自己評価)					合計
			下の方	中の下	中	中の上	上の方	
第Ⅰ類型(勉強中心型)	S高校	度数(名)	3	3	13	9	8	36
		内訳(%)	8.3	8.3	36.1	25.0	22.2	100.0
	A高校	度数(名)	13	15	28	27	14	97
		内訳(%)	13.4	15.5	28.9	27.8	14.4	100.0
第Ⅱ類型(勉強両立型)	S高校	度数(名)	4	5	15	12	**7**	43
		内訳(%)	9.3	11.6	34.9	27.9	**16.3**	100.0
	A高校	度数(名)	7	8	12	9	2	38
		内訳(%)	18.4	21.1	31.6	23.7	5.3	100.0
第Ⅲ類型(課外活動型)	S高校	度数(名)	26	18	18	11	2	75
		内訳(%)	34.7	24.0	24.0	14.7	2.7	100.0
	A高校	度数(名)	11	10	7	6	0	34
		内訳(%)	32.4	29.4	20.6	17.6	0.0	100.0
第Ⅳ類型(マルチ型)	S高校	度数(名)	8	9	16	**23**	5	61
		内訳(%)	13.1	14.8	26.2	**37.7**	8.2	100.0
	A高校	度数(名)	8	8	13	6	3	38
		内訳(%)	21.1	21.1	34.2	15.8	7.9	100.0
第Ⅴ類型(勉強・課外活動以外型)	S高校	度数(名)	22	5	**10**	3	5	45
		内訳(%)	48.9	11.1	**22.2**	6.7	11.1	100.0
	A高校	度数(名)	8	**6**	2	1	1	18
		内訳(%)	44.4	**33.3**	11.1	5.6	5.6	100.0
全体	S高校	度数(名)	63	40	72	58	27	260
		内訳(%)	24.2	15.4	27.7	22.3	10.4	100.0
	A高校	度数(名)	47	47	62	49	20	225
		内訳(%)	20.9	20.9	27.6	21.8	8.9	100.0

※ 2校の間で10%を超える差があるもので大きい方を太字にした。

学校生活注力類型的には、第Ⅰ類型（勉強中心型）、第Ⅱ類型（勉強両立型）、第Ⅳ類型（マルチ型）、第Ⅲ類型（課外活動型）、第Ⅴ類型（「勉強・課外活動以型」の順序で、成績（自己評価）が低くなっている。

全般的には、成績（自己評価）は大きな違いはないと言えるだろうが、A 高校の方で成績(自己評価)の低い生徒が、若干多いように思える。

類型毎に比較してみる。第Ⅰ類型（勉強中心型）では、S 高校の方に高い生徒が多いように思われる。しかしながら、S 高校は第Ⅰ類型（勉強両立型）の生徒数が少ない。生徒数の多い第Ⅲ類型（課外活動型）や第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）で比較的成績(自己評価)が低いものが多いため、全体としては「下の方」が A 高校よりも大きくなってしまう。

逆に A 高校では、第Ⅱ類型（勉強両立型）と第Ⅳ類型（マルチ型）のような勉強から「降りてはいない」のだが注力を減らしている類型の成績(自己評価)が低くなっている。

3．進路志向の 2 校比較

①進学希望の 2 校比較（図表１３）

進路実績の検討でも確認したように2校には大きな差がなかった。これは、進路希望学校種別の点でも同様である。差として目立つものは、6年制課程の国公立大学希望でS高校が多く（8.8%差）、同時で11月時点の調査ではあるが、進路未定と進学先未定が多いことである。逆に、A高校では専門・各種学校希望者がいる。

図表13　「進学希望学校種別」の2校比較

	S高校		A高校	
	度数（名）	内訳(%)	度数（名）	内訳(%)
6年制課程の国公立大学	42	15.8	16	7.0
6年制課程の私立大学	6	2.3	4	1.8
4年制課程の国公立大学	190	71.4	168	73.7
4年制課程の私立大学	20	7.5	27	11.8
その他(海外の四年制公私は不定)	1	0.4	0	0.0
専門・各種学校	0	0.0	4	1.8
進学先未定	2	0.8	1	0.4
進路未定	5	1.9	0	0.0
計	266	100.0	228	100.0

※　S高校は3年11月時点、A高校は9月時点の調査。

②進学希望学校種別と学校の所在地からみた2校比較（図表１４－１・２）

S高校は、進学学校種別を越えて、「札幌市・周辺」に集中する（64.6%）。私立大学では「首都圏」に集中する（90.0%）。すなわち、地元で進学する。そして、思い出してほしいが、「進路未定（含浪人）」が多かったことがそのことと関わっている。

図表14－1　「進学希望学校種別×学校の所在地」の2校比較
(S高校)

		海外	首都圏	東北圏	その他道外	札幌市内・周辺	その他道内	合計
6年制課程の国公立大学	度数（名）	1	0	0	1	**30**	0	32
	内訳(%)	3.1	0.0	0.0	3.1	**93.8**	0.0	100.0
6年制課程の私立大学	度数（名）	1	**3**	0	0	2	0	6
	内訳(%)	16.7	**50.0**	0.0	0.0	33.3	0.0	100.0
4年制課程の国公立大学	度数（名）	0	32	7	19	**132**	8	198
	内訳(%)	0.0	16.2	3.5	9.6	**66.7**	4.0	100.0
4年制課程の私立大学	度数（名）	0	**18**	0	0	2	0	20
	内訳(%)	0.0	**90.0**	0.0	0.0	10.0	0.0	100.0
その他	度数（名）	1	0	0	0	0	0	1
	内訳(%)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
合計	度数（名）	3	53	7	20	166	8	257
	内訳(%)	1.2	20.6	2.7	7.8	64.6	3.1	100.0

※　強調点を太字にした。

A高校は、「札幌市・周辺」の比重は高くない（34.8%）。選択肢としては、「首都圏」（30.8%）と大きな違いがなくなっている。「首都圏」は、私立大学はもちろん、4年制課程の国公立大学においても視野に入ってくる。そして4年制課程の国公立大学希望では、「首都圏」（29.0%）だけでなく、「その他道内」（15.4%）や「東北地方」（12.4%）、そして「その他道内」（9.5%）の比率が高くなる。すなわち、札幌市内・周辺は唯一の選択肢ではなく、

ひとつの選択肢である。「現役合格」を強く勧める A 高校の進路指導は、生徒の地域的な進路志向に大きく影響を与えていると考えられる。生徒は、「現役合格」が可能な進路決定を行っている。

図表14-2　「進学希望学校種別×学校の所在地」の2校比較
(A高校)

		海外	首都圏	東北地方	その他の道外	札幌市内・周辺	その他道内	合計
6年制課程の国公立大学	度数(名)	0	1	1	3	**8**	3	16
	内訳(%)	0.0	6.3	6.3	18.8	**50.0**	18.8	100.0
6年制課程の私立大学	度数(名)	0	0	0	0	**4**	0	4
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	**100.0**	0.0	100.0
4年制課程の国公立大学	度数(名)	0	49	21	16	**57**	26	169
	内訳(%)	0.0	29.0	12.4	9.5	**33.7**	15.4	100.0
4年制課程の私立大学	度数(名)	0	**18**	0	0	7	1	26
	内訳(%)	0.0	**69.2**	0.0	0.0	26.9	3.8	100.0
その他	度数(名)	0	0	0	1	0	0	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
専門・各種学校	度数(N)	0	0	0	0	0	4	4
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0
合計	度数(名)	0	68	22	20	77	34	221
	内訳(%)	0.0	30.8	10.0	9.0	34.8	15.4	100.0

※　強調点を太字にした。

③進学理由の２校比較（図表１５）

図表15　「進学理由」の2校比較

項目	選択率(%)	
	S高校	A高校
ア. 希望する職業に必要だから	45.6	**57.7**
イ. 学生生活を楽しみたいから	39.1	39.2
ウ. 現在やっている課外活動を続けたいから	5.4	同じ項目なし
エ. 新たな課外活動を始めたいから	7.7	
オ. 自分の世界をひろげるため	47.1	45.9
カ. 自分の才能や能力をのばしたい	38.7	39.2
キ. 自分の将来や進路を考える時間が欲しいから	24.1	19.8
ク. もっと教養を身に付けたい	34.1	同じ項目なし
ケ. まだ就職したくないから	5.7	7.7
コ. 進学する方が就職に有利だから	30.7	33.3
サ. みんながゆくから	5.7	4.1
シ. ただなんとなく	5.0	3.2
ス. 学びたい学問があるから	47.9	45.5
セ. 人間関係を作りたいから	23.4	18.9
ソ. 親が勧めるから	3.8	4.1
タ. 教員が勧めるから	0.8	3.6
チ. まだやりたいことが見つからないから	13.4	10.4
ツ. その他	2.3	3.2
母数(名)	261	222

※　5%を超える差があるものを太字にした。項目の記号は、S高校調査に合せた。

S高校生徒の支持を基準にして、大きい方から30%を超えるものを上げてみよう。

「ス．学びたい学問があるから」(47.9%)、「オ．自分の世界をひろげるため」(47.1%)、「ア．希望する職業に必要だから」(45.6%)、「イ．学生生活を楽しみたいから」(39.1%)、「カ．自分の才能や能力をのばしたい」(38.7%)、「ク．もっと教養を身に付けたい」(34.1%)、「コ．進学する方が就職に有利だから」(30.7%) と続く。

2校を比較すると、A高校では、「ア．希望する職業に必要だから」が多い点 (57.7%) に特徴がある。S高校では、「キ．自分の将来や進路を考える時間が欲しいから」(24.1%) や「セ．人間関係を作りたいから」(23.4%) が多少多い程度である。

A高校では、大学を卒業後の職業選択を基準に大学学部の選択をするように進路指導していることの影響が現れている。S高校生徒の選択理由の特徴では、旧来的な進路指導が行われていた時代の進路意識を彷彿とさせる項目において特徴が表れている。

④S高校進学理由の因子分析とその結果（図表１６・１７）

図表16　S高校進学理由の因子分析

(「ツ．その他」を除き、因子数を3としたもの)

	因子			参考：支持された内訳(%)
	1. 自己拡張因子	2. モラトリアム因子	3. 従容因子	
オ．自分の世界をひろげるため	**0.77**	−0.01	−0.11	47.1
カ．自分の才能や能力をのばしたい	**0.69**	−0.04	−0.10	38.7
ク．もっと教養を身に付けたい	**0.65**	0.00	0.01	34.1
イ．学生生活を楽しみたいから	**0.59**	−0.03	0.17	39.1
セ．人間関係を作りたいから	**0.57**	0.04	0.13	23.4
ス．学びたい学問があるから	**0.48**	−0.22	0.04	47.9
エ．新たな課外活動を始めたいから	**0.36**	0.23	−0.12	7.7
キ．自分の将来や進路を考える時間が欲しいから	**0.34**	0.27	0.03	24.1
チ．まだやりたいことが見つからないから	0.09	**0.57**	0.00	13.4
サ．みんながゆくから	−0.18	**0.51**	0.08	5.7
シ．ただなんとなく	−0.09	**0.43**	−0.11	5.0
ケ．まだ就職したくないから	−0.05	**0.40**	0.20	5.7
ア．希望する職業に必要だから	−0.08	**−0.33**	0.16	45.6
コ．進学する方が就職に有利だから	0.23	**0.31**	0.07	30.7
ソ．親が勧めるから	0.00	0.00	**0.53**	3.8
タ．教員が勧めるから	−0.06	0.01	**0.42**	0.8
ウ．現在やっている課外活動を続けたいから	0.15	−0.10	**0.35**	5.4
因子相関行列	1	2	3	
1	—	0.15	0.21	
2		—	0.25	
3			—	

因子抽出法: 主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

※　以下では、S高校に絞って分析している。

図表１５と同じ項目で、S高校生徒の進学意識の因子分析を行った。

三つの因子（進学理由を規定すると考えられる「深層」の要因）が見つかった。それぞれを「自己拡張因子」、「モラトリアム因子」、「従容因子」と命名してみた。職業との直接的な関係が、進学理由に結びついていない（「ア．希望する職業に必要だから」は、これを否定する形で「モラトリアム因子」に組み込まれることになっている）ことが因子分析か

ら確認できる。因子の説明をする。

「自己拡張因子」は、「オ．自分の世界を広げるため」に特徴的な、自分を「大きくする」というニュアンスの進学理由と考えられる。

「モラトリアム因子」は、「チ．まだやりたいことが見つからないから」に特徴的な、決定的な選択からは距離を置きたいというニュアンスの進学理由と考えられる。

「従容因子」は、誰かの勧めに従うというニュアンスの進学理由である。

これを用いて、学校生活注力類型毎に、この類型に区分された生徒個々の、それぞれの因子得点の平均値を算出してみた。図表１７である。三つの因子の観点から、それぞれの類型をどのように評価できるかをみた、と言うこともできる。

図表17　学校生活注力類型別進学理由因子得点の比較

	自己拡張志向因子の因子得点の平均	モラトリアム志向因子の因子得点の平均	従容因子の因子得点の平均	度数（名）
第Ⅰ類型(勉強中心型)	**0.13**	0.08	**−0.13**	35
第Ⅱ類型(勉強両立型)	−0.04	−0.04	−0.03	44
第Ⅲ類型(課外活動型)	−0.05	0.00	0.05	73
第Ⅳ類型(マルチ型)	−0.01	**−0.14**	0.00	60
第Ⅴ類型(勉強・課外活動以外型)	0.09	0.12	0.02	45

※　強調点を太字にした。

第Ⅰ類型（勉強中心型）は、「自己拡張因子」の得点が高く、「従容因子」の得点が低かった。比喩的に言い方になるが、「自分を大きくする」ために進学する。人に言われたからではない。

第Ⅳ類型（マルチ型）は、「モラトリアム因子」の得点が低いという特徴が表れた。同じく比喩的に言い方になるが、まだやりたいことが決まらないので、進学する。

この因子得点の平均値には、それぞれの類型の学習モチベーションの在り方が表れていると考えられるが、この二つの類型以外では、それほど顕著な差はなかった。

Ⅳ．札幌市の公立進学校Ｓ高校における課外活動の現状

１．課外活動への全体的な参加状況と区別

①課外活動への所属（図表１８は文末に掲載する）

課外活動は、「運動部系部活」、「文科系部活」、「外局」、「同好会」に区分される。複数の課外活動に所属する（「掛け持ち」）生徒の場合、「主」な所属を基準にして、「ひとつ所属」、「2 つ所属」、「4 つ所属」を区別した。後の二者が「掛け持ち」である。「3 つ所属」の生徒はいなかった。課外活動を全く行っていない生徒は、52 名と少ない。

②課外活動種別と活動時間（週あたり）（図表１９）

図表19　課外活動種別×活動時間(週あたり)

		活動時間(週あたり)									合計
		0時間	1～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21～25時間	26～30時間	31～35時間	36時間以上	
運動部系部活	度数(名)	0	8	8	20	**46**	23	2	5	1	113
	内訳(%)	0.0	7.1	7.1	17.7	**40.7**	20.4	1.8	4.4	0.9	100.0
文科系部活	度数(名)	1	18	**22**	7	7	7	1	0	2	65
	内訳(%)	1.5	27.7	**33.8**	10.8	10.8	10.8	1.5	0.0	3.1	100.0
外局	度数(名)	0	**9**	4	0	0	0	0	0	0	13
	内訳(%)	0.0	**69.2**	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
同好会	度数(名)	0	**3**	2	0	0	0	0	0	0	5
	内訳(%)	0.0	**60.0**	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
合計	度数(名)	1	38	36	27	53	30	3	5	3	196
	内訳(%)	0.5	19.4	18.4	13.8	27.0	15.3	1.5	2.6	1.5	100.0

※　複数課外活動所属者は主な課外活動として選択したものに帰属させてある。以下も同様。

※　最も内訳の多いところを太字にした。

まず、課外活動を大括りに（「運動部系部活」、「文科系部活」、「外局」、「同好会」の区別）にして、週あたりの活動時間を比較した。

明らかに、「運動部系部活」の活動時間は長い。平均的な部活動でも、週 5 日の活動日と仮定して、1 日 3 時間以上活動していることになる。「文科系部活」はそれに次ぐ。しかし活動時間はかなり減る。「外局」と「同好会」は活動時間が少ない。

③課外活動の種別と課外活動への参加度合い（図表２０）

図表に見るような 5 段階に分けて課外活動への参加度合いを聞いた。

「運動部系部活」は、「5．非常に熱心だった」が最も多い。微妙なところだが、「同好会」、「文科系部活」、「外局」の順でそれに次いでいると考えられる。

全体として、「4．熱心だった」が最多であることからも、S 高校の生徒は熱心に課外活動に取り組んでいるように思われる。学校生活の注力において、課外活動は重要な位置を

占める。

図表20　課外活動種別×課外活動への参加度合い

		課外活動の参加度合い					合計
		1. 全く熱心ではなかった	2. 熱心ではなかった	3. 普通	4. 熱心だった	5. 非常に熱心だった	
運動部系部活	度数(名)	4	3	27	41	**45**	120
	内訳(%)	3.3	2.5	22.5	34.2	**37.5**	100.0
文科系部活	度数(名)	1	4	20	**23**	21	69
	内訳(%)	1.4	5.8	29.0	**33.3**	30.4	100.0
外局	度数(名)	0	0	5	**9**	3	17
	内訳(%)	0.0	0.0	29.4	**52.9**	17.6	100.0
同好会	度数(名)	0	0	1	**4**	2	7
	内訳(%)	0.0	0.0	14.3	**57.1**	28.6	100.0
合計	度数(名)	5	7	53	77	71	213
	内訳(%)	2.3	3.3	24.9	36.2	33.3	100.0

※ 強調点を太字にした。

③個別課外活動と参加度合いの比較（図表２１～２４、図表２５は文末に掲載する。ただし図表の大きさの関係で順番を入れ換えてある）

個別の課外活動の人数（5 人以上）と、参加度合いの「5. 非常に熱心だった」と「4. 熱心だった」への集中の二つの基準で、個別の課外活動を三つに分類した。「熱中課外活動」、「普通課外活動」、「小規模課外活動」である。

熱中課外活動は、4 つの運動部系部活（硬式テニス部、ハンドボール部、バレーボール部、野球部）とひとつの文科系部活（オーケストラ部）である。

普通課外活動は、5 つの運動部系部活（バトミントン部、バスケットボール部、弓道部、ソフトテニス部、サッカー部）と 4 つの文科系部活（軽音楽部、邦楽部、茶道部、美術部）、これに外局の生徒会執行部とダンス同好会を加える。

それ以外が、小規模課外活動である。7 つの運動部系部活と 10 の文科系部活、そしてひとつの外局である。名称は省略する。

この三つには、掛け持ちの有無の点で違いがある。また、「熱中課外活動」は集団競技が多いという特徴がある。競技の違いもあるので、単純な比較ができないが、運動部系部活で「熱中課外活動」の方が、様々な大会で上位にある（全道大会レベル、あるいはインターハイレベル）と思われる。

課外活動参加者のうち、「熱中課外活動」が 75 名（35.2%）、「普通課外活動」が 97 名（45.5%）、「小規模課外活動」が 41 名（19.2%）となった。他方で、課外活動に所属しない生徒は 52 名であった。

２．熱心な課外活動の質的特徴

①課外活動の質的相違（図表２６・２７）

S 高校の生徒は、札幌市に存するという「地の利」から与えられた「余裕」をもってい

た。それが、課外活動への熱心な参加と進路実現を両立可能なものとする環境を形作る。だからこそ、直接、進路指導が関わるものではないが、「どのように」も含めて、課外活動と勉強を両立させるかということは、進路実現上、最重要の課題となる。本稿の課題に引き付けるなら、進路実現と両立しない課外活動は、進路指導上「困った存在」となる。

すなわちS高校においては、進路指導の成功は、学校生活のうちとりわけ課外活動が学業と両立可能であることを条件とする。

したがって、課外活動の分析は、両立がどのようなあり方で成り立つのかに焦点化して行う必要がある。

課外活動分類別に、「課外活動の勉強へのプラス面の有無」を検討した。

課外活動が勉強へプラス面をもっていたとする生徒は、「熱中課外活動」で多い(60.8%)。「普通課外活動」や「小規模課外活動」では半数を下回る。

他方で、「課外活動の勉強へのマイナス面の有無」では、活動時間多寡に応じた形(「熱中課外活動」所属生徒の活動時間は長い)で、マイナス面が感じられている。「熱中課外活動」ではマイナス面への影響は、三分の二に及ぶ。「普通課外活動」では、半数を超える程度でマイナス面が感じられている。「小規模課外活動」は、活動時間も短い(活動時間の中央値で、週あたり1〜5時間)ため、マイナス面の影響は少ない。

図表26　課外活動分類×課外活動の勉強へのプラス面の有無

		課外活動の勉強へのプラス面の有無		合計
		なかった	あった	
熱中課外活動	度数(名)	29	**45**	74
	内訳(%)	39.2	**60.8**	100.0
普通課外活動	度数(名)	49	46	95
	内訳(%)	51.6	48.4	100.0
小規模課外活動	度数(名)	23	17	40
	内訳(%)	57.5	42.5	100.0
合計	度数(名)	101	108	209
	内訳(%)	48.3	51.7	100.0

図表27　課外活動分類×課外活動の勉強へのマイナス面の有無

		課外活動の勉強へのマイナス面の有無		合計
		なかった	あった	
熱中課外活動	度数(名)	25	**49**	74
	内訳(%)	33.8	**66.2**	100.0
普通課外活動	度数(名)	42	50	92
	内訳(%)	45.7	54.3	100.0
小規模課外活動	度数(名)	**30**	10	40
	内訳(%)	**75.0**	25.0	100.0
合計	度数(名)	97	109	206
	内訳(%)	47.1	52.9	100.0

すなわち、「熱中課外活動」では、課外活動がプラス面とマイナス面の両面で勉強に強く影響している。

本稿は、進路指導の観点から、生徒の進路実現と課外活動の両立の問題に関心を持っている。そのため、これ以降では、ここで明らかになったような課外活動の活動量が勉強にもたらす影響が、課外活動のあり方とどのような関係にあるのかに絞って分析する。そのために、「熱中課外活動」において、生徒が両立をどのようになし遂げたのか、あるいはなし遂げられなかったのか、の検討を行う。

②「熱中課外活動」では何がプラス面と考えられていたか(図表２８)

「課外活動の勉強へのプラス面の有無」には、個別の「熱中課外活動」で差があった。「プラス面の有無」で「あった」と回答したの「熱中課外活動」所属者の6割に及ぶが、

特に多くの生徒が「あった」と回答しているのは、ハンドボール部である。平均を少し上回るのが硬式テニス部で、それ以外は平均より低い。逆に「なかった」と回答する生徒は、野球部に多い６割を占める。それぞれの課外活動のあり方が影響しているものと思われる。

図表28　熱中課外活動別課外活動の勉強へのプラス面の有無

		あった	なかった	N.A.	計
硬式テニス部	度数(名)	13	7	0	20
	内訳(%)	65.0	35.0	0.0	100.0
ハンドボール部	度数(名)	**10**	2	0	12
	内訳(%)	**83.3**	16.7	0.0	100.0
バレーボール部	度数(名)	6	4	1	11
	内訳(%)	54.5	36.4	9.1	100.0
野球部	度数(名)	4	**6**	0	10
	内訳(%)	40.0	**60.0**	0.0	100.0
オーケストラ部	度数(名)	12	10	0	22
	内訳(%)	54.5	45.5	0.0	100.0
合計	度数(名)	45	29	1	75
	内訳(%)	60.0	38.7	1.3	100.0

※　強調点を太字にした。

文末に掲載している図表２９で、「プラス面」の具体的な内容を検討する。

共通するものとして、「がんばり」、「忍耐」、「ねばり」等の精神的な強さが鍛えられたことが上げられている。ここで注目したいのは、ハンドボール部に集中的に現れる特徴的な言葉である。「目標」、「計画」、「逆算」等を利用した「生活時間の高度な組織化」を達成すること、端的には「目標から逆算すること」として言語化されている。この目標を現実化する「生活時間の組織化」に注目する必要がある。

・目標から逆算して設定できるようになったこと

・目標を決めて逆算して計画的に勉強できること

（引用は共にハンドボール部所属生徒）

以上のものを例に上げることができる。

類似する趣旨のものとしては、バレーボール部に所属している生徒の以下を上げることができる。

・時間を効率的につかうこと

しかしながら、意識化のされ方に大きな違いがあると思われる。

③熱中課外活動では何がマイナス面と考えられていたか（図表３０・３１）

個別の熱中課外活動において、「課外活動の勉強へマイナス面の有無」にも差があった。

図表30　熱中課外活動別課外活動の勉強へのマイナス面の有無

		あった	なかった	N.A.	計
硬式テニス部	度数(名)	12	8	0	20
	内訳(%)	60.0	40.0	0.0	100.0
ハンドボール部	度数(名)	7	**5**	0	12
	内訳(%)	58.3	**41.7**	0.0	100.0
バレーボール部	度数(名)	6	4	1	11
	内訳(%)	54.5	36.4	9.1	100.0
野球部	度数(名)	**10**	0	0	10
	内訳(%)	**100.0**	0.0	0.0	100.0
オーケストラ部	度数(名)	14	8	0	22
	内訳(%)	63.6	36.4	0.0	100.0
合計	度数(名)	49	25	1	75
	内訳(%)	65.3	33.3	1.3	100.0

※　強調点を太字にした。

図表31　熱中課外活動別課外活動の勉強へのプラス面・マイナス面の対比

		プラス面「有」(a)	マイナス面「有」(b)	(a)-(b)	部員数(名)
硬式テニス部	度数(名)	13	12	1	20
	内訳(%)	65.0	60.0	5.0	
ハンドボール部	度数(名)	10	7	3	12
	内訳(%)	83.3	58.3	25.0	
バレーボール部	度数(名)	6	6	0	11
	内訳(%)	54.5	54.5	0.0	
野球部	度数(名)	4	10	−6	10
	内訳(%)	40.0	100.0	−60.0	
オーケストラ部	度数(名)	12	14	−2	22
	内訳(%)	54.5	63.6	−9.1	
合計	度数(名)	45	49	−4	75
	内訳(%)	60.0	65.3	−5.3	

※　強調点を太字にした。

「マイナス面の有無」で「あった」とする生徒は、約三分の二に及ぶ。これも個別の課外活動で違いが大きい。「あった」とする生徒は、野球部で突出して多い。全員である。そして「なかった」とする生徒が多いのは、ハンドボール部である。しかし、あまり差がないとも言える。

このプラス面とマイナス面を比較した図表３１から、同じ「熱中課外活動」であっても、課外活動の勉強への影響という点で、質的な差異があることがわかる。

「プラス面『有』」から「マイナス面『有』」を引いた数字が、プラスでそれが大きいほど、課外活動が勉強に与える影響は生徒にプラスとして考えられていると言える。

プラスになっているのは、ハンドボール部と硬式テニス部である。特にハンドボール部に所属する四分の一の生徒は、課外活動が勉強に好影響を与えていると考えている。

このことは活動時間が多く、生徒たちがそれに打ち込んでいたとしても、それが勉強との両立にストレートに影響するわけではないことを、しかも個人的な、属人的な「問題」としてではなく、課外活動自体の質の問題が関わっていることを示唆する。

ところでマイナス面の具体的な内容についてまとめたのが図表３２で、文末に掲載している。

マイナス面は、「時間」、「勉強できないこと」、「疲れ」等である。これは先ほどのプラス面と異なり、個別の課外活動で大きな差がない。

すなわち課外活動と勉強の関係、両立の問題は、課外活動の勉強へのプラス面がどのように作りだされ、意識されるかにある。

④勉強と課外活動の両立のための苦労（図表３３）

図表33　熱中課外活動別課外活動と勉強の両立のための苦労の有無

		あった	なかった	N.A.	計
硬式テニス部	度数(名)	12	**7**	1	20
	内訳(%)	60.0	**35.0**	5.0	100.0
ハンドボール部	度数(名)	**11**	1	0	12
	内訳(%)	**91.7**	8.3	0.0	100.0
バレーボール部	度数(名)	9	2	0	11
	内訳(%)	81.8	18.2	0.0	100.0
野球部	度数(名)	8	2	0	10
	内訳(%)	80.0	20.0	0.0	100.0
オーケストラ部	度数(名)	**21**	1	0	22
	内訳(%)	**95.5**	4.5	0.0	100.0
合計	度数(名)	61	13	1	75
	内訳(%)	81.3	17.3	1.3	100.0

※ 強調点を太字にした。

全体として生徒は、両立のために苦労をしている（平均 81.3%）。しかし、これにも若干の差がある。硬式テニス部は、「苦労がなかった」も多い（35.0%）。最も苦労したと答えたのは、オーケストラ部である（95.5%）。これにハンドボール部が次ぐ（91.7%）。これら以外は平均的である。

「苦労した」の具体的内容を図表３４にまとめた。文末に掲載している。

苦労の内容は、主に「時間」問題である。これと活動がきつくて疲れるがあがっている。

「苦労がなかった」理由は図表３５にまとめた。これも文末に掲載している。

「苦労がなかった」は、「楽しかった」ので「苦労を感じなかった」、あるいは「部活がハードでなった」等となっている。

生徒の大多数が両立を追い求め「苦労する」。しかし一部の生徒は諦める。諦めてしまえば「苦労はない」からだろう。

⑤勉強と課外活動の両立のためにとった行動（図表３６～３８）

さらに、勉強と課外活動の両立で「苦労した」生徒に限定して、どのような行動をとったのかをたずねた。

これも個別の熱中課外活動で差が大きい。「行動した」生徒は三分の二を超える。しかし、野球部や硬式テニス部はその度合いが相対的に低い（それぞれ 50.0%、58.3%）。とりわけ行動した生徒が多いのがハンドボール部である（90.8%）。

具体的な行動の内容をまとめたのが図表３７である。文末に掲載している。

行動内容は、抽象的な言い方をすると「時間使用の高度化」とまとめることができる。具体的には、「スキマ時間」の有効活用である。また、課外活動の勉強へのプラス面の検討の際に指摘したようなハンドボール部に典型的な、目標との関係で生活全体におよび「時

間的な組織のあり方」の次元まで言語化された場合は、それほど多くはない。またここではハンドボール部の生徒にしても、方法的には「時間使用の高度化」をとっている。

行動しなかった理由も図表３８にまとめた。文末に掲載している。

理由として上げられているのは、「諦め」と「割り切り」である。

図表36　熱中課外活動別課外活動と勉強の両立のための行動の有無

		行動した	行動しなかった	N.A.	部員中の「苦労した」生徒数	部員数(名)
硬式テニス部	度数(名)	7	5	0	12	20
	内訳(%)	58.3	41.7	0.0	100.0	
ハンドボール部	度数(名)	**10**	1	0	11	12
	内訳(%)	**90.9**	9.1	0.0	100.0	
バレーボール部	度数(名)	7	1	1	9	11
	内訳(%)	77.8	11.1	11.1	100.0	
野球部	度数(名)	4	4	0	8	10
	内訳(%)	50.0	50.0	0.0	100.0	
オーケストラ部	度数(名)	13	7	1	21	22
	内訳(%)	61.9	33.3	4.8	100.0	
合計	度数(名)	41	18	2	61	75
	内訳(%)	67.2	29.5	3.3	100.0	

※　強調点を太字にした。

３．課外活動と進路志向

①課外活動の進路志向への影響（図表３９～４２）

図表39　課外活動分類(「課外活動をしていない」を含む)×性別

		性別		合計
		男子	女子	
熱中課外活動	度数(名)	32	43	75
	内訳(%)	42.7	57.3	100.0
普通課外活動	度数(名)	30	**67**	97
	内訳(%)	30.9	**69.1**	100.0
小規模課外活動	度数(名)	**24**	18	42
	内訳(%)	**57.1**	42.9	100.0
課外活動をしていない	度数(名)	**29**	23	52
	内訳(%)	**55.8**	44.2	100.0
合計	度数(名)	115	151	266
	内訳(%)	43.2	56.8	100.0

※　平均から5%を超える差があるものを太字にした。

課外活動が進路志向に与える影響を検討するために、ここまで使用した３つの課外活動

分類（「熱中課外活動」、「普通課外活動」、「小規模課外活動」）に、「課外活動をしていない」生徒も加えて、全体を４つの集団に分けた。

この４つの集団の基本属性の差異を検討する。

性別という点では、「熱中課外活動」所属は、平均的である。母数となっている男女数に差がある（女子が多い）ため、女子の方が多いが、平均的である。「普通課外活動」は、女子の方が多い（69.1%）。これは、女子に「普通課外活動」所属生徒が多いためである。逆に男子は、「小規模課外活動」に所属する生徒と「課外活動をしていない」生徒が多い（それぞれ 57.1%、55.8%）。次に、文系・理系の所属を検討する。

図表40　課外活動分類（「課外活動をしていない」を含む）×文・理系

		所属系			合計
		文系	理Ⅰ系	理Ⅱ系	
熱中課外活動	度数（名）	36	34	4	74
	内訳(%)	48.6	45.9	5.4	100.0
普通課外活動	度数（名）	**54**	40	3	97
	内訳(%)	**55.7**	41.2	3.1	100.0
小規模課外活動	度数（名）	19	**22**	1	42
	内訳(%)	45.2	**52.4**	2.4	100.0
課外活動をしていない	度数（名）	22	**28**	2	52
	内訳(%)	42.3	**53.8**	3.8	100.0
合計	度数（名）	131	124	10	265
	内訳(%)	49.4	46.8	3.8	100.0

※　平均から5%を超える差があるものを太字にした。

文系・理系の所属では、性別と所属の関係（男子は理Ⅰ系に多く、女子は文系が多い）がそのまま表れた形となっている。非常に少数の事例となるが、医学・歯学進学を目指す生徒の所属する理Ⅱ系で、熱中課外活動所属者が多い点は重要であるかもしれない。

図表41　課外活動分類（「課外活動をしていない」を含む）×進路決定時期

		決定時期										合計
		1年春	1年夏	1年秋	1年冬	2年春	2年夏	2年秋	2年冬	3年春	3年夏	
熱中課外活動	度数（名）	10	5	3	1	2	6	9	10	11	13	70
	内訳(%)	14.3	7.1	4.3	1.4	2.9	8.6	12.9	14.3	15.7	18.6	100.0
普通課外活動	度数（名）	16	6	5	4	6	7	11	9	10	18	92
	内訳(%)	17.4	6.5	5.4	4.3	6.5	7.6	12.0	9.8	10.9	19.6	100.0
小規模課外活動	度数（名）	8	2	0	0	3	**5**	5	3	3	7	36
	内訳(%)	22.2	5.6	0.0	0.0	8.3	**13.9**	13.9	8.3	8.3	19.4	100.0
課外活動をしていない	度数（名）	**13**	2	2	0	3	3	4	2	**14**	6	49
	内訳(%)	**26.5**	4.1	4.1	0.0	6.1	6.1	8.2	4.1	**28.6**	12.2	100.0
合計	度数（名）	47	15	10	5	14	21	29	24	38	44	247
	内訳(%)	19.0	6.1	4.0	2.0	5.7	8.5	11.7	9.7	15.4	17.8	100.0

※　平均から5%を超える差があるものを太字にした。

※　回答者266名中、進路未定者5名、進路決定時期のN.A.が14名あった。

ところで課外活動分類は、進路決定時期にも部分的に関わっている。これを検討したのが図表４１である。

全体としては、「１年春」が最も多い（19.0%）。これに受験が迫ってきた「３年夏」が次ぐ（17.8%）。そして「３年春」も多い（15.4%）。入学時に進路決定している生徒以外では、進路指導の節目と関わりながら進路決定している様子がうかがえる。

課外活動分類（「課外活動をしていない」を含む、以下この注記は省略する）で特徴的なのは、「課外活動をしていない」生徒たちである。

「１年春」という最も初期の時点で決定している場合が四分の一を超える。「課外活動をしていない」ことと考え合わせるなら、進路を決めているから課外活動へ所属しないという判断をしたと考えられる生徒たちである。しかし同時に、「課外活動をしていない」生徒たちの四分の一超は、受験が完全に視野に入る「３年春」に進路決定している。

このことをどのように説明できるのかは難しいところだが、少なくとも進路決定時期が二つに分化していると言える。

ところで「熱中課外活動」所属生徒に特徴的なのは、「１年春」に進路決定した生徒が少ない点にある。高校に入ってから考えるつもりであったのかもしれない。そして課外活動において最上級学年として運営を担う時期となる「２年秋」から進路決定が進んで行く。

「普通課外活動」所属の生徒は平均的な経過をたどるが、「３年夏」が多くなり（19.6%）、進路決定は遅れがちであるようだ。

「小規模課外活動」所属の生徒も、「３年夏」が多くなる（19.4%）点に特徴がある。

より具体的な進学希望ではどのような違いがあるのだろうか。

図表42　課外活動分類(「課外活動をしていない」を含む)×進学希望学校種別

		進学希望学校種別					合計
		6年制課程の国公立大学	6年制課程の私立大学	4年制課程の国公立大学	4年制の私立大学	その他	
熱中課外活動	度数(名)	12	2	57	**2**	0	73
	内訳(%)	16.4	2.7	78.1	**2.7**	0.0	100.0
普通課外活動	度数(名)	10	3	70	8	1	92
	内訳(%)	10.9	3.3	76.1	8.7	1.1	100.0
小規模課外活動	度数(名)	2	0	**35**	5	0	42
	内訳(%)	4.8	0.0	**83.3**	11.9	0.0	100.0
課外活動をしていない	度数(名)	8	1	38	5	0	52
	内訳(%)	15.4	1.9	73.1	9.6	0.0	100.0
合計	度数(名)	32	6	200	20	1	259
	内訳(%)	12.4	2.3	77.2	7.7	0.4	100.0

※　平均から5%を超える差があるものを太字にした。

この図表４２からわかるのは、課外活動分類が進学希望学校種別に、それほど影響していないことである。平均と 5%差があるのは、「熱中課外活動」に所属する生徒の 4 年制課程の私立大学希望で少ないこと、「小規模課外活動」に所属する生徒の 4 年制課程の国公立大学希望で多いこと、である。「熱中課外活動」に所属する生徒に注目するなら、6 年制課程の国公立大学志望が若干多いことが指摘できる。

以上のように、高校生活において多大な苦労をしながら両立していても、それは進路希望学校種別に影響していない。

４．課外活動と学校生活における注力の関係

S 高校の分析の最後に、課外活動の所属と学校生活における注力の関係を整理しておく。

①学校生活注力類型と進学希望学校種別（図表４３）

S 高校の特徴を A 高校との差異の観点から分析する際に用いた学校生活注力類型を再び用いて、進学希望学校種別の関係を確認しておく。

図表43　学校生活注力類型×進学希望学校種別

		進学希望学校種別					合計
		6年制課程の国公立大学	6年制課程の私立大学	4年制課程の国公立大学	4年制の私立大学	その他	
第Ⅰ類型(勉強中心型)	度数(名)	4	1	25	4	0	34
	内訳(%)	11.8	2.9	73.5	11.8	0.0	100.0
第Ⅱ類型(勉強両立型)	度数(名)	**8**	1	32	3	0	44
	内訳(%)	**18.2**	2.3	72.7	6.8	0.0	100.0
第Ⅲ類型(課外活動型)	度数(名)	8	3	59	2	1	73
	内訳(%)	11.0	4.1	80.8	2.7	1.4	100.0
第Ⅳ類型(マルチ型)	度数(名)	6	1	**51**	2	0	60
	内訳(%)	10.0	1.7	**85.0**	3.3	0.0	100.0
第Ⅴ類型(勉強・課外活動以外)	度数(名)	5	0	31	**9**	0	45
	内訳(%)	11.1	0.0	68.9	**20.0**	0.0	100.0
合計	度数(名)	31	6	198	20	1	256
	内訳(%)	12.1	2.3	77.3	7.8	0.4	100.0

※ 平均から5%を超える差があるものを太字にした。

S 高校の生徒は、浪人が可能な「余裕」のある状況にあった。しかし、だからといって第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）を除き、週あたり勉強日数の点では遜色がなかった（図表１１）。

そのため、この図表４３においても、進学希望学校種別の点であまり大きな差がない。

平均から 5%を超える差があるものを抜き出してみる。母数は小さいが第Ⅱ類型（勉強両立型）に 6 年制課程の国公立大学希望が多い（18.2%）。第Ⅳ類型（マルチ型）に 4 年制課程の国公立大学希望が多い（85.0%）。そして、第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）に 4 年制課程の私立大学希望が多い（20.0%）である。

第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）は、週あたり勉強日数と対応する形で、進学希望を 4 年制課程の私立大学にしているようだ。

S 高校と A 高校の違いは、第Ⅰ類型（勉強中心型）の量の違いにあった。そして浪人することも視野に入れることができる S 高校において進路指導の成功は、学校生活の質を高めること、課外活動所属者の多さと熱心さを考慮にいれるなら、とりわけ課外活動が学業と両立可能であることを条件としていた。

最後に、学校生活の注力は課外活動の違いと、どのように関係しているのかを検討する。

図表４４である。

図表44　課外活動分類（「課外活動をしていない」を含む）×学校生活注力類型

		学校生活注力類型(大類型)					合計
		第Ⅰ類型(勉強中心型)	第Ⅱ類型(勉強両立型)	第Ⅲ類型(課外活動型)	第Ⅳ類型(マルチ型)	第Ⅴ類型(勉強・課外活動以外型)	
熱中課外活動	度数(名)	3	13	**39**	17	2	74
	内訳(%)	4.1	17.6	**52.7**	23.0	2.7	100.0
普通課外活動	度数(名)	14	17	27	24	13	95
	内訳(%)	14.7	17.9	28.4	25.3	13.7	100.0
小規模課外活動	度数(名)	**8**	5	7	11	**11**	42
	内訳(%)	**19.0**	11.9	16.7	26.2	**26.2**	100.0
課外活動をしていない	度数(名)	**11**	9	3	10	**19**	52
	内訳(%)	**21.2**	17.3	5.8	19.2	**36.5**	100.0
合計	度数(名)	36	44	76	62	45	263
	内訳(%)	13.7	16.7	28.9	23.6	17.1	100.0

※　平均から5%を超える差があるものを太字にした。

「熱中課外活動」に所属する生徒は、当然、第Ⅲ類型（課外活動型）が多くなる（52.7%）。そして課外活動の負担が大きいので、第Ⅰ類型（勉強中心型）にはならない（4.1%）。また、第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外）は少ない（2.7%）。すなわち友人関係や趣味を捨て、注力を絞り込んでいる。

「普通課外活動」に所属する生徒は、第Ⅲ類型（課外活動型）が最も多く（28.4%）、第Ⅳ類型（マルチ型）、第Ⅱ類型（勉強両立型）と続く（それぞれ 25.3%、17.9%）。第Ⅰ類型（勉強中心型）も平均的で、注力のあり方も分散している。

「小規模課外活動」に所属する生徒は、第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）が最も多く（26.2%）、これに第Ⅳ類型（マルチ型）と第Ⅰ類型（勉強中心型）が続く（それぞれ 26.2%、19.0%）。課外活動は、学校生活でそれほど大きな部分を占めていない。両立であるとする生徒もそれほど多くない（11.9%）。

「課外活動をしていない」生徒は、第Ⅰ類型（勉強中心型）と第Ⅴ類型（勉強・課外活動以外型）に、後者に厚く分化してしまう（それぞれ 21.2%、36.5%、）。ちょうど進路決定時期が「１年春」と「３年夏」に分化したのと同じような分化した形になる。課外活動に所属していないから、「課外活動をしていない」は当然として、勉強からも降りる生徒も三分の一を超える。

以上のように、課外活動のあり方は、学校生活の注力に大きな影響を与えていた。さらに、課外活動に所属していてもその活動時間や参加の熱心さは、勉強との両立に直線的な影響を与えるだけではなかった。課外活動のあり方は、両立の困難との「付き合い方」にも大きく関わった。精神面の鍛練の機会として利用するだけではなく、ハンドボール部に特徴的であった「目標」、「計画」、「逆算」等の生活全体の「時間的な組織のあり方」を高度化すること、特に「目標から逆算すること」にまで言語化された場合もある。この内容は、キャリア教育が目指しながらも、やすやすとは到達できない境地を示している。

V．まとめ

S高校の生徒の課外活動と進路志向との関係は、地方進学校A高校のそれと大きく異なる。地方進学校から高等教育へ進むことは困難になってきている。高等教育へのアクセスが保護者の経済的な能力に大きく依存する我が国では、とりわけ地域的な格差の広がりが大きな影響力をもつ。

A高校の生徒は、地方にあるために「余裕」のある高校生活は送ることができない。A市で浪人生活をしても学力を向上が可能になるような予備校はない。札幌市で下宿に暮らしながら予備校に通学するのであれば、目標を1ランク下げても「現役合格」するほうがましであるし、保護者も本人もそれを望む。

他方でS高校の生徒が、高校生活を「謳歌」できるのは、札幌市が北海道の中心都市で、総合大学を筆頭に多数の大学があり、自宅から通学できるからである。またたとえ不幸なことに浪人をしたとしても、全国大手予備校が集中する札幌では、進学のための学力を向上させるために予備校に通学するにしても、下宿する必要がない。今後、札幌市内にも地域の疲弊の影響が及んでくるが、それにはまだ時間がある。

A高校の場合、進路指導を含めた生徒指導の背景にあるのは、地域の疲弊という事実、家庭の経済的な苦境という事実である。これをバネに、生徒を勉強に「追いつめる」ことができる。生徒はやすやすと「追いつめられる」しかない。このような状況は、進路指導に比重を置いた生徒指導が容易であり、十分に機能する土壌を作りだしている。生徒は、この現状を受け止めるか、受け止められないかを中心にして分化してゆくことになる。A高校の学校生活注力類型が第Ⅰ類型（勉強中心型）に集中していたが、第Ⅳ類型（マルチ型）や第Ⅴ類型（勉強・課外活動以型）において、週あたり勉強日数ががっくりと落ちていたのは、このことを物語る。

他方でS高校の進路指導は、A高校によりも複雑な状況を抱える。「余裕」のある状況下で、生徒の進路志向や学習モチベーションが弛緩しないためには、学校教育が生徒を内的に（自律的なものとして）支える力をもつ必要があり、それを可能にする学校生活を生徒自身が構築できなければならない。S高校で「課外活動をしていない」生徒の進路志向が二つに分化する傾向にあったことは、このことを傍証する。「誘惑の多い」札幌市で高校生活を送るS高校の生徒にとって、一心不乱に勉強だけをするのは簡単なことではない。

ところで本稿は、S高校の課外活動と進路志向の関係をみてきた。

生徒の課外活動への参加の在り方を検討することで、課外活動への参加の程度が一義的に学校生活の注力の在り方を決めてしまうのではないことがわかった。学校生活の中で、どのように友人関係や趣味という生活領域の広がりも含めて限定する（打ち込む）か、についての生徒なりの理路（考え方）が重要である。課外活動をどのように、あるいはどのような質のものとして取り組むのか、特に課外活動と進路実現をどのような理路（考え方）で結びつけるのか、すなわち両立のあり方を貫く思想性とともにハビトゥス[4]が重要になる。

言い方を変えれば、S高校のような札幌市の公立進学校において生徒が学習モチベーシ

---

4 ピエール・ブルデュー、1989、『ディスタンクシオンⅠ』、藤原書店。同、1990、『ディスタンクシオンⅡ』、藤原書店（原著は、1979年）

ョンを持ち続けることができる条件は、A高校のような「追いつめる／追いつめられる」形では、上手く行かないことを示唆する。これは、「課外活動をしていない」生徒が、学校生活注力類型の第Ⅰ類型（勉強中心型）になるわけではない（図表４４）ことからも強く示唆される。

したがって進路指導・キャリア教育を含めた生徒指導を考える時、生徒が高校生活において注力する課外活動を、どのように質を高く行い勉強と「両立させるか」、立場を換えると、生徒にとっては勉強と課外活動の両立を支える一貫した理路（考え方）、そしてそのハビトゥスを生みだせるのかが重要となる。

熱中課外活動の幾つかの課外活動においてそれは、「目標」、「計画」、「逆算」等を利用した「生活時間の高度な組織化」を達成すること、端的には「目標から逆算すること」として言語化されていたと、ひとまず言うことができる。キャリア教育は、自己陶冶の原理（「未来の目標構築が現在の生活の規律化を進めること」）を生徒の内部に形成することにあると「はじめに」で指摘した。S高校の一部の生徒は、勉強と課外活動の両立の苦労を通じて、自己陶冶の原理をこのような言葉として勝ち取っていた。

そして本稿の分析対象と離れてしまうが、今後の課題としてひとつ指摘しておく。ここで取り上げたA高校も、そしてA市も北海道では、まだ恵まれた豊かな都市である。そしてA高校は、北海道の地方からも高等教育へ進学可能であるような教育実践を行う数少ない高校である。もっと人口規模の小さな都市になると、高等教育へと進学する生徒自身が減る。図表５で、A市の中学校２年生で高等教育への期待と可能性をもった生徒が少ないことを指摘したが、これよりも一段と事態は深刻である。北海道において、もう最終学歴が高校であるしかない地方は多く、これからさらに増えて行くと考える。

このような時代において、高校教育の質をどのように確保するのか、札幌市の進学校で可能であったような生活全体の「時間的な組織の仕方」、「目標から逆算すること」に及ぶような経験を、生徒にどのようにつかみ取ってもらうのか、北海道の教育学が取り組まなければならない課題は重い。

図表18　課外活動所属総表

		ひとつ所属	二つ所属						四つ所属	主な所属として選択した生徒数
			運動系＋文科系	運動系＋同好会	運動系＋外局	文科系＋外局	文科系＋同好会	外局＋同好会		
運動部系部活	**硬式テニス**	20	0	0					0	20
	バトミントン	12	3	0					1	16
	バスケットボール	13	0	0					0	13
	ハンドボール	12	0	0					0	12
	バレーボール	11	0	0					0	11
	弓道	7	2	2					0	11
	野球部	10	0	0					0	10
	ソフトテニス	5	2	0					0	7
	サッカー	4	0	1					0	5
	卓球	3	1	0					0	4
	陸上	3	1	0					0	4
	剣道	0	1	1					0	2
	山岳	2	0	0					0	2
	スキー	2	0	0					0	2
	柔道	1	0	0					0	1
	水泳	1	0	0					0	1
	小計	106	10	4					1	121
文科系部活	**オーケストラ**	22				0	0			22
	軽音楽	7				0	1			8
	邦楽	6				0	0			6
	茶道	1				0	4			5
	美術	5				0	0			5
	物理研究	3				1	0			4
	華道	2				1	0			3
	写真	2				1	0			3
	マンガ・イラスト	3				0	0			3
	文芸	2				1	0			3
	化学	2				0	0			2
	パソコン研究	1				1	0			2
	書道	0				1	0			1
	合唱	1				0	0			1
	囲碁・将棋	1				0	0			1
	小計	58				6	5			69
外局	生徒会執行部	12				1		1		14
	図書局	3				0		0		3
	小計	15				1		1		17
同好会	ダンス	4		1			1	1		7
	小計	4		1			1	1		7
課外活動所属者全体		183	10	5	0	7	6	2	1	214

※　複数所属者がない課外活動を太字にした。

※　課外活動を行っていない生徒は52名。

図表21　個別課外活動(主たる所属)×参加度合い(運動系部活)

		課外活動の参加度合い					合計
		1. 全く熱心ではなかった	2. 熱心ではなかった	3. 普通	4. 熱心だった	5. 非常に熱心だった	
硬式テニス	度数(名)	**0**	**0**	**4**	**8**	**8**	**20**
	内訳(%)	**0.0**	**0.0**	**20.0**	**40.0**	**40.0**	**100.0**
バトミントン	度数(名)	1	0	5	2	8	16
	内訳(%)	6.3	0.0	31.3	12.5	50.0	100.0
バスケットボール	度数(名)	0	1	5	5	2	13
	内訳(%)	0.0	7.7	38.5	38.5	15.4	100.0
ハンドボール	度数(名)	**0**	**0**	**1**	**4**	**7**	**12**
	内訳(%)	**0.0**	**0.0**	**8.3**	**33.3**	**58.3**	**100.0**
バレーボール	度数(名)	**1**	**0**	**1**	**5**	**4**	**11**
	内訳(%)	**9.1**	**0.0**	**9.1**	**45.5**	**36.4**	**100.0**
弓道	度数(名)	0	0	4	3	4	11
	内訳(%)	0.0	0.0	36.4	27.3	36.4	100.0
野球部	度数(名)	**0**	**0**	**0**	**3**	**7**	**10**
	内訳(%)	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**30.0**	**70.0**	**100.0**
ソフトテニス	度数(名)	0	0	2	3	2	7
	内訳(%)	0.0	0.0	28.6	42.9	28.6	100.0
サッカー	度数(名)	0	1	0	**4**	0	5
	内訳(%)	0.0	20.0	0.0	**80.0**	0.0	100.0
卓球	度数(名)	0	0	2	2	0	4
	内訳(%)	0.0	0.0	50.0	50.0	0.0	100.0
陸上	度数(名)	0	0	2	0	2	4
	内訳(%)	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	100.0
剣道	度数(名)	1	0	0	1	0	2
	内訳(%)	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0
山岳	度数(名)	1	0	1	0	0	2
	内訳(%)	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0
スキー	度数(名)	0	1	0	0	0	1
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
柔道	度数(名)	0	0	0	0	1	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0
水泳	度数(名)	0	0	0	1	0	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0
運動系部活小計	度数(名)	4	3	27	41	45	120
	内訳(%)	3.3	2.5	22.5	34.2	37.5	100.0

※　複数所属者がない課外活動を太字にした。

図表24　個別課外活動(主たる所属)×参加度合い(同好会)

		課外活動の参加度合い					合計
		1. 全く熱心ではなかった	2. 熱心ではなかった	3. 普通	4. 熱心だった	5. 非常に熱心だった	
ダンス同好会	度数(名)	0	0	1	**4**	**2**	7
	内訳(%)	0.0	0.0	14.3	**57.1**	**28.6**	100.0

図表22　個別課外活動(主たる所属)×参加度合い(文

		課外活動の参加度合い					合計
		1. 全く熱心ではなかった	2. 熱心ではなかった	3. 普通	4. 熱心だった	5. 非常に熱心だった	
オーケストラ	度数(名)	0	0	2	**10**	**10**	22
	内訳(%)	0.0	0.0	9.1	**45.5**	**45.5**	100.0
軽音楽	度数(名)	0	1	3	3	1	8
	内訳(%)	0.0	12.5	37.5	37.5	12.5	100.0
邦楽	度数(名)	0	1	4	1	0	6
	内訳(%)	0.0	16.7	66.7	16.7	0.0	100.0
茶道	度数(名)	0	0	3	1	1	5
	内訳(%)	0.0	0.0	60.0	20.0	20.0	100.0
美術	度数(名)	0	0	1	**3**	**1**	5
	内訳(%)	0.0	0.0	20.0	**60.0**	**20.0**	100.0
物理研究	度数(名)	0	0	1	1	2	4
	内訳(%)	0.0	0.0	25.0	25.0	50.0	100.0
華道	度数(名)	0	0	0	1	2	3
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	33.3	66.7	100.0
写真	度数(名)	0	0	3	0	0	3
	内訳(%)	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
マンガ・イラスト	度数(名)	0	0	0	2	1	3
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	66.7	33.3	100.0
文芸	度数(名)	0	0	2	0	1	3
	内訳(%)	0.0	0.0	66.7	0.0	33.3	100.0
化学	度数(名)	1	1	0	0	0	2
	内訳(%)	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100.0
パソコン研究	度数(名)	0	1	1	0	0	2
	内訳(%)	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0
書道	度数(名)	0	0	0	1	0	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0
合唱	度数(名)	0	0	0	0	1	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0
囲碁・将棋	度数(名)	0	0	0	0	1	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0
文化系部活小計	度数(名)	1	4	20	23	21	69
	内訳(%)	1.4	5.8	29.0	33.3	30.4	100.0

※　複数所属者がない課外活動を太字にした。

図表23　個別課外活動(主たる所属)×参加度合い(外

		課外活動の参加度合い					合計
		1. 全く熱心ではなかった	2. 熱心ではなかった	3. 普通	4. 熱心だった	5. 非常に熱心だった	
生徒会執行部	度数(名)	0	0	2	**9**	**3**	14
	内訳(%)	0.0	0.0	14.3	**64.3**	**21.4**	100.0
図書局	度数(名)	0	0	3	0	0	3
	内訳(%)	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
外局小計	度数(名)	0	0	5	9	3	17
	内訳(%)	0.0	0.0	29.4	52.9	17.6	100.0

図表29　熱中課外活動別課外活動の勉強へのプラス面の具体的内容

課外活動名	内容
硬式テニス部	・がんばる力、仲間との競争 ・どうすれば上へ行けるのか、の考え方 ・ねばること ・ポジティブになった ・やる気、時間が減ったことでのプレッシャー ・根気 ・周りに刺激された ・心身ともに強くなること ・数学や物理に対していいことを思いついたこと ・精神力 ・忍耐力がついたこと ・部活の友達ががんばってるから自分もやろうと思ったこと
ハンドボール部	**・メンタル面、時間活用術** **・計画するようになったこと** **・計画を練れるようになったこと** **・時間の使い方が上手くなったこと** **・集中力を継続すること。逆算すること** **・少ない時間を有効に使う術を学んだこと** ・人として様々な面で成長し、また素敵な方々と出会えたこと ・全力で取り組む姿勢 **・目標から逆算して設定できるようになったこと** **・目標を決めて逆算して計画的に勉強できること**
バレーボール部	・引退してから時間がいっぱいあること **・時間を効率的につかうこと** ・体力ついたこと ・体力と、持久力と、集中力 **・部活を行うことで勉強の時間にめりはりがつき、かえって勉強のための時間をとることができた**
野球部	・へこんだときにはげましてもらった ・授業の大切さに気づいたこと ・集中力がついた ・精神的に勉強がつらくなくなったこと ・耐ストレス
オーケストラ部	・ねばり強さ **・時間にメリハリがつけられるようになった** ・集中力。がんばること ・大人数をまとめるスキルが向上したこと ・短時間でも集中できたこと ・仲間 ・長時間勉強するのがそんなに苦でなくなったこと ・特に親しくなった友達に気軽に質問できたこと ・忍耐力 ・脳の活性化？ ・部活動で忙しいため、授業で理解しようと心がけることができたこと ・様々な知識人がいたこと

※　強調点を太字にした。

図表32　熱中課外活動別課外活動の勉強へのマイナス面の具体的内容

課外活動名	内容
硬式テニス部	・テストと大会がかぶる ・テスト前も部活があった **・自由な時間が少なかったこと** **・授業中にねむくなったこと** **・全道大会が近いとかいろいろでテスト勉強が満足にできなかった。** **・体力的につかれて勉強が手につかない** ・大会などでテスト期間中にぶつかること ・大会前練習が多かった ・部活を優先しすぎたこと **・勉強しようとしても眠いこと** **・勉強する時間が減ったこと**
ハンドボール部	**・時間がないこと** **・時間が無くなること** **・時間ない** **・時間不足** **・大会時期に勉強がおろそかになること** **・定期考査前も大会とかぶってたりで休みがなくあまり勉強できなかったこと** **・眠気に勝てず、勉強時間が確保できないこと**
バレーボール部	**・時間がとれない** **・時間がない** **・時間がなくなる** **・時間が少なくなったこと** **・大会前で練習がきつくなったときに勉強する体力がなくなってしまったこと**
野球部	**・いそがしかった** **・家庭学習が出来なかったこと** **・時間がない** **・時間と体力がとられる** **・時間の欠落** **・時間的な面** ・周りの人に遅れをとったこと **・疲れたこと言い訳にして勉強しなかったこと** **・部活をしていた時期は、ほとんど勉強できなかったこと** ・練習の量と質がともなわない点（長くやる割に勝てない）
オーケストラ部	・たまにおかしくなること **・テスト前でも活動があったこと、体力がなく、すぐ疲れてしまうこと** **・ねむい** ・夏休みは部活しかできなかったこと **・時間がとれない** **・時間がなかったこと** **・時間を多くけずられた** **・受験勉強の時間を割いて出遅れている** **・全体的に時間があまりとれなかった** **・勉強がおろそかになること** ・勉強のときも部活のことを考えてしまった ・勉強をしない日があった。 **・勉強時間が短くなった** **・勉強時間の減少**

※　強調点を太字にした。

図表34－1　熱中課外活動別課外活動と勉強を両立するための苦労の内容

課外活動名	内容
硬式テニス部	・テスト期間もすべて練習だったので ・テスト勉強ができない ・帰宅後の体力 **・時間がない、疲れて** **・時間を上手に使うこと** ・授業についていく **・勉強する時間が短くなった** ・勉強との両立 ・毎日勉強する ・眠気 ・両立できなかった
ハンドボール部	・ねむかったこと ・家にいても部活のことを考えてしまい勉強がはかどらなかった **・学習時間の確保** **・時間がたりない** **・時間がないを言い訳にしてしまう** **・時間の使い方** **・時間配分** ・体力 ・疲れている自分と戦う ・部活がハードで毎日疲れてなかなか勉強できなかった **・勉強できる時間がなかなか確保できない**
バレーボール部	・どちらか片方に集中するとどちらか片方に身が入らないということ **・時間が足りなくなる** **・時間のつくり方** ・成績悪い ・体力的につかれて思うように勉強できなかった ・疲れがぬけず、眠くなる。 ・勉強をしなくなった ・両立できなかった
野球部	・どっちもどっち **・学習時間の確保** **・時間** **・時間がない** **・時間がないこと** **・時間的な点** ・疲れて勉強がおろそかになりすぎたこと家でほとんど勉強しなかった ・眠い

※　強調点を太字にした。

図表34－2　熱中課外活動別課外活動と勉強を両立するための苦労の内容（続き）

課外活動名	内容
オーケストラ部	**・時間がとれない（勉強）** **・時間がない** **・時間がなかった** **・時間が足りない** **・時間が足りなかったこと** **・時間の使い方** ・成績があまりよくない **・体力、時間が足りないこと** ・体力的に ・疲れた中勉強しなければならない ・部活が3年の夏休み後半までハードだった ・部活に一方的になった **・勉強時間がなかった** ・模試と合奏がバッティングしたこと **・練習でつかれて、勉強時間をみいだせれなかった**

※　強調点を太字にした。

図表35　熱中課外活動別課外活動と勉強を両立するための苦労がなかった理由

課外活動名	内容
硬式テニス部	・そう感じなかった ・何だかんだ楽しかった ・楽しかった ・指導者がいないため、あまり厳しくない部活 ・授業に集中していた ・部活が楽しかったから ・両者は別者なので
ハンドボール部	・両立させる気がなかった
バレーボール部	・そこまで部活がハードでなかった ・苦労じゃなかったから
野球部	・授業をちゃんと聞けばよいだけのこと ・勉強のウエイトを減らした

※　強調点を太字にした。

図表37　熱中課外活動・課外活動と勉強を両立するためにとった行動の内容

課外活動名	内容
硬式テニス部	**・すき間時間に勉強** ・よく考えた ・割り切って寝る ・睡眠時間を減らした **・大会の合間などのすきま時間に勉強する** **・朝に勉強した** ・定期テスト前の休みに集中して勉強
ハンドボール部	**・1日のリズムを作った** **・1日の時間計画** **・すき間時間を利用した。** **・せめて小テストは合格できるように毎日少しずつは見直し** **・休み時間などを利用すること** **・授業の合い間のすきま時間や、朝早く起きて勉強すること** **・地下鉄の中で勉強** **・朝勉強するときもあった** ・追試にならないように学習 ・眠たくならないようにコーヒーを飲んだ
バレーボール部	・どちらもがんばろうと気持ちを切りかえた ・塾に行った ・少しでも机に座ること **・早く起きて朝勉強** **・朝型の人間になった。** **・朝早く起きて勉強**
野球部	**・スキマ時間の活用** **・すき間時間を利用** ・どっちも頑張った **・家に帰ったらすぐ寝て、朝早く起きて勉強**
オーケストラ部	**・スキマ時間の活用** **・すきま時間を見つけること** **・すきま時間有効活用** **・すき間時間で勉強した** ・頑張って勉強した ・授業で内容を理解するようにした。テストではあきらめず勉強 ・少しでも机にむかうようには **・早起き** ・短時間で集中できるようになった **・地下鉄など、スキマ時間に勉強** ・部活の時間を減らした ・部活を早く切りあげた ・友達と一緒に勉強会

※　強調点を太字にした。

図表38　熱中課外活動別課外活動と勉強を両立するために行動しなかった理由

課外活動名	内容
硬式テニス部	・できなかった ・どうしようもないこと ・解決策が見つからなかった N.A.2名
ハンドボール部	・楽
バレーボール部	・あきらめた
野球部	・どうにかなると思ったから ・引退してから頑張ろうという考えに至った ・終わってから全力でやると決めたから ・部活に集中したかった
オーケストラ部	・できる時間で頑張った ・めんどくさかった ・慣れると思ったから ・術が皆無 ・特になし ・部活したかったから ・部活動の活動時間をへらすことはできなかった

第２章　地方都市における若者の雇用と社会的自立

院生担当分割愛

【目　次】

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．夕張市の概況
　１．少子高齢化の中の人口流出
　２．夕張市の産業
Ⅲ．地元における雇用
　１．　農業部門（メロン農家）
　２．福祉部門
　　(1) 空知における福祉職に就く人材の養成――M 町立介護福祉学校
　　(2) 福祉事業所――特別養護老人ホーム R 園を事例に
　３．企業部門
Ⅳ．「夕張メロン」生産組合・青年部所属の若者
　１．家族と進路
　２．就農前後の意識変容
　　(1) 生業を通した意識形成――「夕張メロン」栽培の魅力、仕事のやりがい
　　(2)「競争と共同」という理念
　　(3) 青年部のつながり
Ⅴ．まとめ

調査経過一覧

［北海道夕張市関係調査］

2010 年調査

・6 月 9 日　北海道夕張高等学校教頭への聞き取り調査
　　教頭　木村賢治氏、進路指導部長　熊谷泰昌氏
・6 月 16 日　夕張市事業所に関する聞き取り調査と従業員調査の依頼
　　タイヘイグーチング　平野忍氏（工場長代理）
　　福祉施設清光園　鳴海重雄氏（施設長）
　　佐藤秀悌（法人本部総務副主任）
　　シチズン夕張　山田信一氏（精密加工部部長）
　　坂野俊行氏（総務課）
・8 月 24 日　夕張市立夕張中学校教頭への聞き取り調査と生徒調査の依頼
　　夕張市立夕張中学校　小林広明氏（教頭）
・8 月 4 日　夕張農業協同組合に対する聞き取り調査と青年調査の依頼
　　夕張農業協同組合　前田昌一氏（代表理事組合長）
　　木下誠氏（営農部営農推進課課長）
・8 月 25～28 日　夕張市教育委員会　秋葉政博氏（教育委員会事務局教育課長）
　　松本邦由氏（教育課主幹）
　　夕張市事業所従業員・農民からの聞き取り調査
　　（タイヘイグーチング、福祉施設清光園、シチズン夕張
　　夕張農業協同組合）

2011 年

・なし

2012 年

・2 月 7 日　夕張市事業所に関する聞き取り調査
　イサオ製作所　工場長
　アクリフーズ　中村雅彦氏（副工場長）、澁谷満生氏
・2 月　栗山町立北海道介護福祉学校への聴き取り調査
　山代賢治氏（事務局長）
・6 月 15 日　夕張高校 OB・OG 調査（イサオ製作所、アクリフーズ）
・6 月 19、20 日　夕張高校 OB・OG 調査（東京都）
・10 月 5 日　夕張市農業協同組合・農業生産組合に対する聞き取り調査
　　工藤正則氏（夕張メロン組合組合長）
　　黒澤久司氏（夕張市農業協同組合営農部部長）

・11 月 2 日　夕張市農業協同組合・農業生産組合青年部部員からの聞き取り調査
・12 月 10 日　夕張高校 OB・OG 調査（夕張市、タイヘイグーチング）
・12 月 25 日　夕張高校 OB 調査・OG 調査（夕張市、清光園）

［北海道釧路市関係調査］

2010 年

・8 月 19、20 日　釧路市立中学校に対する聞き取り調査と生徒調査の依頼
釧路市立鳥取中学校　松野孝氏（校長）
釧路市立大楽毛中学校　杉村典史氏（校長）
松村浩二氏（教頭）
釧路市立幣舞中学校　藤原久則氏（校長）
釧路市立阿寒中学校　須藤厚志氏（校長）
青木栄氏（教頭）
釧路市立景雲中学校　荒川浩一氏（教頭）
・9 月 16 日　釧路市教育委員会に対する聞き取り調査
須藤光秋氏（学校教育部指導主事室指導主事）
秦直人氏（学校教育部指導主事室指導主事）
年代香氏（学校教育部指導主事室指導主事）

2011 年

・11 月 1、2 日　釧路市高等学校に対する聞き取り調査
北海道釧路湖陵高等学校　浅野泰弘氏（進路指導部長）
北海道釧路工業高等学校　小久保慶一氏（進路指導部長）
北海道釧路商業高等学校　阿部文雄氏（進路指導部長）
北海道釧路東高等学校　平林秀樹氏（進路指導部教諭）
北海道釧路北陽高等学校　山中剛氏（進路指導部長）

［北海道札幌市調査関係］

2011 年

・2 月 23 日　北海道教育委員会に対する聞き取り調査
北海道教育長学校教育局高校教育課　西崎毅氏（課長）
北海道教育長学校教育局高校教育課普通教育指導グループ
赤間幸人氏（主幹）
沖野高志氏（主幹）

・7月11日　北海道若年者就職支援センターに対する聞き取り調査
益山健一氏（センター長）
・7月28日　ヤングハローワークに対する聞き取り調査
成田昌子氏（室長）
・8月9日　北海道札幌白陵高等学校に対する聞き取り調査・生徒調査の依頼
土岐均氏（校長）
佐藤毅己氏（教頭）
江尻巧氏（教頭）
藤井学氏（教務部長）
矢橋佳之氏（ガイダンス部長）
遠藤秀人氏（進路指導部長）
・8月10日　北海道札幌東豊高等学校に対する聞き取り調査・生徒調査の依頼
岩佐聖司氏（教頭）
上野秀俊氏（進路指導部長）

2012年

・6月21日　北海道札幌西高等学校に対する聞き取り調査・生徒調査の依頼
片岡辰三氏（校長）
増田雅彦氏（副校長）
・8月8日　北海道庁農政部農業経営課担い手育成グループに対する聞き取り調査
並川敏万氏（主査）
尾野昭宏氏（主査）
渡辺稔之（主幹）
・8月22日　北海道札幌白陵高等学校調査結果報告会

平成 22～24 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）研究成果報告書（研究課題番号　22530904）

「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究」

研究代表者　浅川和幸

連絡先　〒060-0811　　札幌北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院
TEL・fax　011-706-2604

平成 25 年 3 月 29 日発行
印刷　北海道印刷企画株式会社
TEL　011-562-0075